

42421

教科書文庫

4
810
42-1938
20000 66891

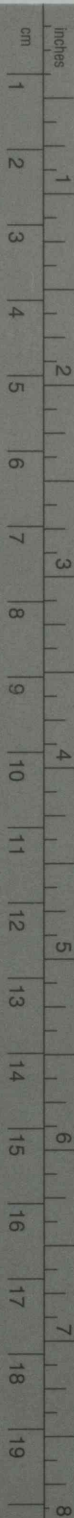
S.13
1938

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4b
810
BB13



國語
女子用
六



資料室

日五月二十年三十和昭

濟定檢省部文

用科語國校學女等高

岩波編輯部編

國

語

女子用

岩波書店刊



46
810
BB13

大正十一年三月
東京女子大学出版部

國語 女子用 卷六 目次

一 神ほぎ	浦原有明	一
二 水戸のみゆき	(昭憲皇太后御集)	四
三 松下村塾	徳富蘇峰	一三
四 妹へ	吉田松陰	二三
五 瑤泉院	大佛次郎	二七
六 機	佐藤春夫	三九
七 楯火	小林一茶	五四

八 小刀の味 高村光太郎 五六

九 藝能 (十訓抄) 六〇

一〇 人道 (二宮翁夜話) 六五

一一 労働 内村鑑三 七一

一二 米國の一面 厨川白村 七五

一三 人生の本流 與謝野晶子 八一

一四 絲車 吉村冬彦 八五

一五 大父の形見 福澤諭吉 九五

一六 浮島が原 (義經記) 一〇三

一七 余吾の湖 室鳩巢 一一〇

一八 庭の梅 賀茂真淵 一二四

一九 智慮 (宇治拾遺物語) 一二八

二〇 狐塚 (續狂言記) 一三五

二一 敵討以上 菊池寛 一三五

二二 日本の魔法鏡 一五一

賀茂真淵
田安元義
平賀宗義
橋本曙
大隈言
野村望東尼

國語 女子用 卷六

一 神ほぎ

蒲原有明

蒲原有明
名は隼雄
詩人
明治九年生

晴れわたりたる秋の日なり。

爽やかなる空の鏡に

(穢れにし都會も今日や襖ぐらむ)

映りかぎろふ銀杏の高樹。

ゆゆしく、いつくしき銀杏樹の

淨まはりたるよそほひに
えもいひがたき

秋の葉の淡き黄金の光。

あまりにも清しきその姿見て

わがこころ、都會の

慘ましき刺激に疲れたる

甲斐なきこころは、今、忍び泣く。

威も高に、かつ妙なる注連木よ、

日影そのよそほひを照らせば、

ここに黄金の神祝かむほろなして

聲無き聲のかがやきは天を揺する。

げにも産土の神の森ぬきんでて

孤り立つ銀杏の高樹、その奇魂くしみたまを

爪立ちて仰ぎ崇む。しかすがに

わが悲しみは更にまた深まさりゆくかな。

〔出所〕
有明詩抄

御作者
昭憲皇太后
御諱は美子

明治天皇の皇
后

大正三年崩御
御壽六十五

上野の停車場

東京市下谷區
に在る

東北本線の起
點

東宮

大正天皇
大后宮

英照皇太后
孝明天皇の皇
后

明治三十年崩
御 御壽六十
五

典侍幸子
萬里小路幸子

二 水戸のみゆき

明治二十三年十月二十六日といふ日、茨城のあがたへみゆきせさせたまふ。こは近衛兵の演習をしたしく御覽ぜさせたまはむとてなりけり。みづからも從ひ奉るべくかねておほせごとありしかば、いとうれしくていでたつ。この大御代ならずば、いかで女の身にてかゝることを見むとおもふに、おのづから心もいさみたちてうちゑまれぬ。

御車、上野の停車場にとゞまる。やがて樓の上にぞのぼらせたまふ。東宮にも御送りに、とくより参りたまへり。大后宮よりも、典侍幸子御使ひに参りて、あつきおほせごとども奏す。みづからもかしこき御言葉うけたまはる。かくておと

侍従長
徳大寺實則
公爵
内大臣に至る
大正八年歿
年八十二

利根川
群馬・新潟・
長野三縣の界
に在る三國山
脈に發源し關
東平野を貫流
して太平洋に
注ぐ
關東地方第一
の大河

どをはじめ送り奉る人々多かるを、もらしたまはず御前近くめして御言葉あり。ほどなく侍従長参りて、何ごとともとのひたりと奏す。やがて劔璽をさきだてて汽車に召させたまふ。みづからもつらなれる車にのる。

笛の音きこゆるまもなく、煙をあとにして、御車はとくす、みぬ。道のほど、大かたは田畑にて、さのみかはれることもなし。されど、いづこも稻のみりよきを見るは、民のためうれしきことぞかし。埼玉のあがたは、さいつころの洪水に利根川の水あふれきとて、民のいたづきておほしたてし畑つものなども皆あれ果てたり。河の如き處もありて、みゆきをろがむ人々も、あるは水に入り、あるは舟を浮かべなどす。いかにして一日々々を送りつらむとおもふに、胸いたうなりもてゆ

水戸
茨城縣水戸市
舊城内
水戸城址
水戸市の中央
部に在る
師範學校
茨城縣師範學
校
舊城内二の丸
に在る

宍戸
茨城縣西茨城
郡宍戸町
水戸市の西に
當る

く。そこを過ぎぬれば、稻葉の浪、田のみにみちあふれたるけしきに、心もかはりぬ。處々のさまめづらしなどいひつゞくる間に、はやう水戸につかされたまふ。

停車場より御馬車にて行在所にいらせたまふ。こは舊城内にある師範學校をそれと定めたまへるなりとぞ。とばかりありて、例の御對面のことあり。果てさせたまひし後も、いさゝか疲れさせたまふみけしきなくて、あすの演習の方略書などとうでさせて御覽ず。かく御心にかけてさせたまふを見奉るもかしこし。この夜も常のごとく十一時におほとのもりぬ。

二十七日、げふも天氣よし。八時よりいでたたせたまふ。汽車にて宍戸といふ處までわたらせたまひ、それより金華山

有栖川宮
熾仁親王
陸軍大將
當時參謀總長
明治二十八年
薨 御年六十

北白川宮
能久親王
陸軍大將
當時陸軍少將
明治二十八年
薨 御年四十
九
岩間村
現西茨城郡岩
間町
宍戸町の南に
當る

と名附けたる御馬にめさせたまふ。有栖川宮、北白川宮をはじめ、おとゞその外あまたの人々、近衛の將校なども馬にて従ひ奉りぬ。みづからは馬車にてゆく。

岩間村にいたらせたまふころ、遠近に煙たちのぼり、銃の音こゝかしこにきこえて、赤白の旗、風にうちなびき、馬のいなゝくこゑもところゝにきこえたり。たゝかひたけなはならむとおもふころは、銃の音もたえまなきに、御心いさせたまひて、折々はことかたに御馬すゝめさせつゝ、ねもごろに御覽じたまふ。折しも秋の末つかたなれど、目かげは猶あつくおぼゆるに、更にいとはせたまふみけしきもなきを、この演習にいでたる兵どもはさらなり、文武のつかさ人、なべてかしこみ奉るなるべし。ほどなく終りぬと奏するより、御野立にてし

成井村
茨城縣新治郡
關部村東成井
岩間町の南に
當る
筑波山
同縣筑波・眞
壁・新治三郡
の界に在る
東成井の西方
に當る

ばしいこはせたまひ、さて汽車にめして行在所へかへらせた
まふ。

二十八日も昨日の時刻よりいでたまひて、こたびは成井村
にて御覽あり。筑波山近く見えてけしきいとよし。大かた
は、きのふのごとし。されど今日は敵のちかづきたりと見え
て、大砲小銃のおとはげしく、廣き原にもひびきわたりぬ。上
には例の御馬にて、道も定めさせたまはず、森の中、松の林など
にわけいりて見めぐらせたまふに、木の枝の御あぶみにかゝ
るもいとかしこし。みづからも、車よりいでて小銃の連發又
は大砲のうちかたなども見ずやと附添へる士官のいふに、さ
らばとておりたつ。黒けぶりたちのぼる中に火氣見えて、は
げしき音のきこえたる、いといさまし。事あらむ日は親妻子

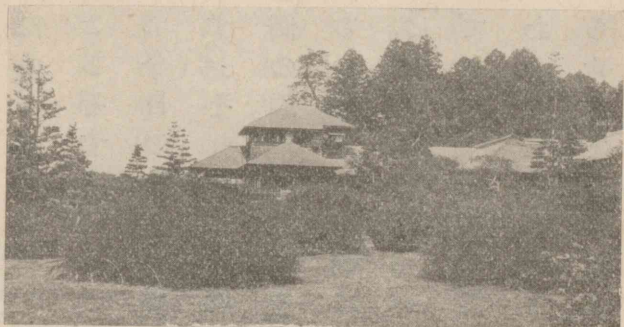
をもかへりみず、君のため命をすてたゝかひなむとおもふ
に、いとたのもしくはあれど、又いたはしくて胸もふたがるこ
ちぞする。

今日の演習も果てぬれば、御野立にて晝のおものきこしめ
す。それより御馬上にて觀兵式分列式御覽ず。みづからは
例の馬車にて見る。終りて審判あり。小松宮はじめ將校う
ちつどひて御前にすゝむ。兩日のいたづきをねぎらひたま
ふ御言葉あり。かたじけなみ奉りて敬禮するさま、見るもめ
でたし。小松宮には兩日の演習のよしあしを高らかにこと
わりたまひぬ。しばし御休みありて、汽車にて行在所にかへ
らせたまふ御道よりおぼしたゝせて、縣廳へ臨幸ならせたま
ふ。今日はあやにくに御風のこゝちにて、例ならず見えさせ

小松宮
彰仁親王
元帥陸軍大將
明治三十六年
薨 御年五十
八

縣廳
茨城縣廳
水戸市北三の
丸に在る

常磐公園
借樂園ともいふ
水戸市の西部に在る
日本三公園の
一
好文亭
常磐公園の西南隅に在る
徳川齊昭の創建
徳川昭武
齊昭の子
常陸國(茨城縣)水戸藩主侯爵
明治四十三年歿
年五十八
仙波湖
常磐公園の東南、水戸市と東茨城郡縁岡村との界に在る



水戸好文亭

たまふをもてかくしてかくつとめさせたまふ、いとかしこし。みづからはおほせごとによりて、常磐公園なる好文亭といふところにく。いたりつけば、徳川昭武その外人人出で迎へたり。梅あまた植ゑたる林あり。こは事ある時のために、實をたくはへむとてなりとぞ。さまざまの木立ありて、庭のつくりざまいとおもしろし。老松のかげに石の碁盤將碁盤すゑおきたるめづらかにて、しばしたちよりて見る。高きところなれば、家のうちより仙波湖見わたさる。十五夜の月のさしのぼ

中納言齊昭
徳川齊昭
水戸家九代の主
萬延元年歿
年六十一

弘道館
縣廳の東、弘道館公園内に在る水戸藩の學校
齊昭の創建
記
弘道館記
齊昭撰書

るけしきいとよし。色づく小田も見おろされたり。こは中納言齊昭の世をのがれて後、心やすくすまひして、民のなりはひを見むために造りしといふ。さもあるべくおもはる。家の内廣らかにて、杉戸には詩の韻字のこらずかゝせて詩人を招く時のためとし、又五十音、てにをはをかゝせて歌人のためとしたる心しらひのあつさをおもふにいとゆかし。また板敷あり。こゝは心ある人々にをり／＼みきなど、あたへし處なりとぞ。たちかへる道のほど、弘道館の碑を見る。八角の堂のうち、寒水石の大きやかなる立てり。世にしられたる記を、自筆のまゝほりいれたるなりけり。一句々々讀みもてゆくに、その人の御國をおもふ心ざし慕はれて涙ぐまれぬ。戸びらにはこまやかなるほり物あり。かもるとおぼしきと

ころには、易の八卦をほりつけたり。昔はこゝに學舎あまたありきといふ。げに珍しきところを見しかな。是も上のおほせごとなくばといとうれしくて、時の過ぐるも覺えず。人「夜更け侍りぬべし」といふに驚かされて、いそぎかへる。月夜なれど、かゞり火たき、提燈などあまた照らして晝のごとし。御前に參る。上には六時ばかりに歸りましましきとき、て、おくれ侍りぬなど奏するに、うちわらはせたまふ。好文亭のことなどつばらかにとおもへど、とみにいひつくすべうもあらねば、かたはしのみ奏す。記さまほしきことども多かれど、筆もすゝまず。ことに、あす東京へかへりまさむとて、御調度どもとり納むるにものさわがしければ、かきさしてやみぬ。

(昭憲皇太后御集)

徳富蘇峰
名は猪一郎

著述家

大阪毎日・東
京日日新聞社

社賓

貴族院議員

帝國學士院會
員 帝國藝術

院會員

文久三年(二
五二三)生

松下村塾

現山口縣萩市

椿東に在った

松陰

吉田松陰

二三頁参照

下田

現静岡縣賀茂
郡下田町

三島

現同縣田方郡
三島町

三 松下村塾

徳 富 蘇 峰

松陰は天成の鼓吹者なり、感激者なり。渡海の策敗れて下田の獄に繋がるゝや、獄吏に説くに、自國を尊び、外國を卑しめ、綱常を重んじ、彝倫を敍つべきを以てし、獄卒の眼に涙あらしめたり。下田より檻輿江戸に赴き、途三島を経るや、警護の匹夫に向かひて大義を説き、彼等をして憤勵の氣色に見れしめたり。其の獄にあるや、感化は同囚者に及び、獄卒に及び、遂に司獄者までも彼が門人となるに至れり。彼の在る所、四圍彼の如き人を生ず。是、何によりて然るか。薔薇の在る所、土も亦香しといふに非ずや。而して、彼が最も其の鼓吹者たり、感激者たる特質を現したるは、松下村塾に於て之を見る。

赤間關の砲臺
毛利藩が赤間關(現下關市)に築いた砲臺
文久三年四箇國聯合艦隊と戦つた
奇兵隊
萩藩士高杉晋作等が組織した義勇隊
伊藤博文
政治家
内閣總理大臣
公爵
舊萩藩士
明治四十二年歿
安政二年
二五一年
孝明天皇の御代
野山の獄
現萩市南古萩町に在つた萩藩の獄

松下村塾は幕府顛覆の卵を孵化したる保育場の一なり。維新の天火を燃やしたる聖壇の一なり。笑ふ勿れ、其の火、燐よりも微かに、其の卵、豆よりも小なりしと。赤間關の砲臺は



(筆洞松浦松) 陰松田吉

粉にすべし、奇兵隊の名は滅すべし、然れども松下村塾に至りては、獨り當時に於て結果の偉大なるものありしのみならず、流風遺韻、今に及んで猶人をして欽仰歎美の情禁ざる能はざらしむるものあり。彼が門下の一人なる伊藤博文は言はずや、如今廟廊棟梁、器多^{クハ}、是松門受^{ケル}、教人^シと。彼は安政二年十二月、野山の獄より出でて家に蟄居せしめ

玉木
玉木正韜
通稱文之進
舊萩藩士
明治九年歿
年六十七
久保
久保久成
通稱五郎右衛門
舊萩藩士
文久元年歿
年五十八

られたり。而して後には、蟄居中家學を授くるの許しをも得たり。松下村塾の名は、其の内叔玉木、外叔久保等が相繼いで用ゐたる所にして、松陰これを襲用したりと雖も、吾人が所謂松下村塾に至りては、松陰を推して其の開山とせざるべからず。蓋し、松陰が松下村塾に直接の關係を有したるは、安政三年の秋より安政五年の暮までにして、其の歲月は僅かに二箇年半に過ぎず。しかも此の二箇年半の歲月が、其の後の日本歴史に於ける千波萬濤の激起點となりたるなり。

彼は未だ僅かに二十七歳要するに是、白面の一中書生のみ。而して彼がよく其の力よりも大なる感化を及し、彼が人物と匹敵する否、或點に於ては寧ろ彼よりも優れたる弟子を出し得たるは何ぞ。「感在^{カニ}、知己^チ」の一句、これを説明して餘りあるべ

士規七則
 松陰が安政二年野山獄中で草した七箇條の教訓
 斃れて已む
 死して後に已むの四字は、言簡にして義該ぬ。堅忍果決確乎として、抜くべからざるものは、是を合きて術無きなり。
 (士規七則)

し。
 彼は造化兒の手に成りたる精神的爆裂彈なり。一たび物に觸著すれば轟然として火星を飛ばす。此の時に於ては、物も碎け、彼も亦碎く。彼の全體は燃質にて組織せられたり、火氣に接すれば乍ち焰となる。其の焰となるや、鐵も鎔かすなり、金も鎔かすなり、石も鎔かすなり、瓦も鎔かすなり。彼の人に接するや、全心を擧げてす。彼の人を愛するや、全力を以てす。彼は往々インスピレーションの爲に精神的高潮に達す。而して之を以て他に接し、他を導いて此の高潮に達せしむ。知るべし、彼が教育の道他なし、唯己が眞骨頭大本領を據べて以て之を他に及すのみなるを。
 彼が金誠たる士規七則に就いて見るに、質實義勇、斃れて已



田吉松陰筆士規七則

むの眞骨頭を以て尊皇攘夷の大本領を發揮したるもの、彼、是を以て自ら感激し、彼、是を以て自ら鼓舞す。其の一呼、虎嘯き、一吸、龍躍るもの、亦故なしとせず。
 怪しむ勿れ、彼が師を以て自ら居らざるを。彼の眼中、師弟なくして唯朋友あるのみ。是は彼が年齒猶壯なるが爲、一は學校といはんよりも同志者の結合といふに近きが爲なるべしと雖も、又彼が天性然るべきものあり。顧ふに、其の弟子

が、彼が骨冷やかなる後に至るまで、猶涕を垂れて松陰先生を説くもの、豈故なしとせんや。

既に義勇節概の眞骨頭たり、攘夷尊皇の活題目たるを知らば、松下村塾の所謂教育なるものも亦知るべきのみ。教育とは何ぞ、東坡の留侯論中の語を假り來れば、其意不在書^ラの一句にて足るべし。彼等が學問は、書物の上の學問に非ずして實際の上の學問なり。眼前の活事實を材料としたる學問なり。其の熱心に考究せしは、米國より和親を申し込めり、これは如何に爲すべきか「攘夷の大詔渙發せり、之を奉戴して運動するには、如何なる事を爲すべきか」といふが如き類にして、學校たるや改革運動の本部たるや區別なく、學問たるや運動の評議たるや境界なく、學問即ち事業、事業即ち學問にして、坐して言

東坡
蘇東坡
名は軾
支那宋代の文人
皇紀一七六一
年歿 年六十
六
留侯論
漢の高祖の功臣張良を評した論
唐宋八大家文讀本所收

久坂玄瑞
名は通武
通稱義助
幕末の勤皇家
松陰の高弟
萩藩士
元治元年(二
五二四)歿
年二十五
左傳
春秋左氏傳
三十卷
春秋の註釋書
魯の左丘明編
八家
唐宋八大家文
讀本
三十卷
唐・宋兩代の
八大家の文集
清の沈德潛編

ふべく、起ちて行ふべく、行うて敗るゝも、苟も大義に合せば、更に意とする所なしといふにあり。然れば彼等の學問は他日の用意に非ず。今日學ぶ所は即ち今日の事にして、今日行ふを得べく、また行はざるべからざるの責任を有す。之を譬へば、猶劍道の師範が道場を戦陣の眞中に開くが如く、其の勝負は所謂眞劍の勝負にして、勝つ者は活き、負くる者は死せんのみ。其の及第、其の落第、總べて活事實の上に存す。

彼等は如何にして此の活學問を講じたるか。彼が久坂玄瑞に與へたる書中に曰ふ、

隔日、左傳八家會讀、勿論塾中常居七つ過ぎ會讀終る。夫より畠又は米春き、在塾生と之を同じくす。米春き大いに其の妙を得、大抵兩三人、同じく上り、會讀しながら之を

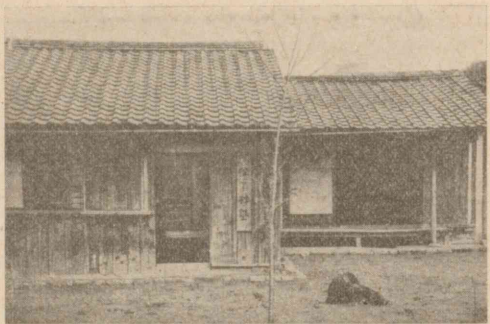
史記 百三十卷
黃帝から漢の武帝に至るまでの史書
漢の司馬遷著

福原又四郎 名は利貞
松陰の門人 萩藩士

五十年後の今日
明治二十六年

春く。史記など二十四五葉讀む間に米精げ畢る、亦一快なり。
と。米を春きながら會讀する先生あれば、糠を篩ひながら講義を聞く生徒もあるべし。彼が他日再び野山の獄に投ぜられたる時に於て、福原又四郎に書き與へ、尊皇攘夷の事を論じ、諸友の因循なるを尤む。曰く、彼等或は又背き去ると雖も、蓋し村塾爐を圍み、徹宵の談を忘れざるべし」と。嗟呼、寒爐火盡きて灰冷やかなる處、霜雁月に叫んで人靜かなる時、三五の青年相團欒し、灰に晝がきて天下の經綸を講じ、東方の白むを知らざりしが如き、五十年後の今日に於て、猶人をして永懷堪ふべからざらしむ。況や時勢迫り、人物起ち、天下動かんとする當時に於てをや。

アルプス ヨーロッパの西南部に横たはる大山脈



松 下 村 塾

彼は社會の寵孫にあらず、彼が子弟も亦然り。彼等は恰も雪を踏んでアルプス嶺を攀づる旅客の如し。其の隆凍苦寒を凌がん爲には、互に負載し抱擁し、自他の體溫によりて其の呼吸を保たざるべからず。艱難は同情を生じ、同情は恩愛を生ず。先生前に斃れて弟子後に奮ふ。彼は知己の感を以て其の子弟を陶冶せり、激勵せり。彼は活ける模範となり、子弟に先立ちて難に殉ぜり。否、子弟の爲に難に殉ぜり。此の時に於て、懦夫と雖も猶起つべし、況や平生の素養あるものに於てをや。況や恩愛の情、知己の感あるものに於てをや。

萩城
現萩市の西北
隅に在つた
洪太尉が云々
支那の長編小
説水滸傳の發
端に見える

彼は其の子弟に向かつて我が如く做せといへり。而して做せり。彼等豈徒然として止まんや。

其の時を以てすれば、二年半に満たず。其の處を以てすれば、萩城の東郊なる矮屋に過ぎず。而して洪太尉が伏魔殿を發きて一百八の妖星を走らしめたる如く、唯此の中より無数の活劇及び活劇を演ぜし大立者を出したる所以のもの、豈其の由る所なくして然らんや。世或は一人を以て興り、一人を以て亡ぶ。個人の社會に及す勢力も亦輕視すべからざるものありといふべし。

(吉田松陰)

吉田松陰

名は矩方

通稱大次郎

後寅次郎

幕末の先覺者

長門國(山口

縣)萩藩士

安政六年(二

五一九)歿

年三十

妹

名は千代

兒玉祐之の妻

大正十三年歿

年九十三

十一月二十七日

安政元年

父

杉常道

通稱百合之助

萩藩士

母

名は瀧

村田氏

兄

杉民治

通稱梅太郎

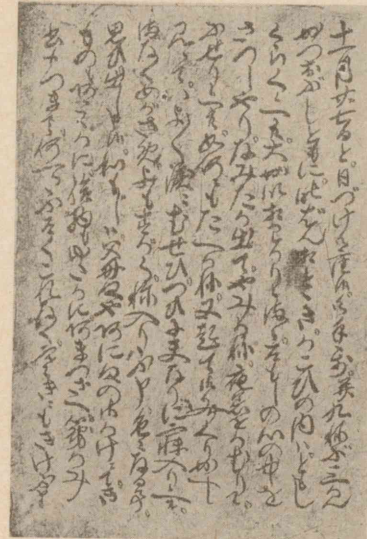
四 妹 へ

吉 田 松 陰

十一月二十七日と日づけ御座候御手紙、並びに九ねぶ蜜柑かつをぶし、ともに昨晚相とゞき、かこひの内はともし暗く候へども、大がい相わかり候まゝ、そもじの心の中を察しやり、涙が出てやみかね、夜著をかむりてふせり候へども、如何にもたへかね、また起きて御文くりかへし見候て、いよゝゝ涙にむせび、つひにそれなりに寐入り候へども、まなく目がさめ、よもすがら寐入り申さず、色々なる事思ひ出し申し候。わもじは、父母さまや兄さまの御かげにて、著物もあたゝかに食べものもゆたかに、あまつさへ筆紙書物まで何一つ不足これなく、寒きにもきけ申さず候間、御安心なさるべく候。

そもじの御家
 兒玉家
 をばさま
 兒玉寛備の妻
 祐之の母
 をぢさま
 兒玉寛備
 通稱太兵衛
 祐之の父
 萩藩士
 萬吉
 祐之の子
 赤穴
 赤穴氏
 吉田・兒玉兩
 家の親族

そもじの御家、をばさまも御なくなりになられ候事なれば、
 そもじ萬端心懸け候はでは相すまぬ事、殊にをぢさまも年
 まし御よはひ高くならせられ候事ゆゑ、別して御孝養を盡
 くし候へかし。又萬吉
 も日々ふとり申すべく
 候へば、心を用ひて育て
 候へ。赤穴のばあさま
 は御まめに候や。御老
 人の御事、萬事氣をつけ
 てあげ候へ。かゝる御老人は家の重寶と申すものにて、金
 にも玉にもかへらるゝものにこれなく候。そもじ事は、い
 とけなき折より心得よろしきものと思ひ、一しほ親しく思



吉田松陰筆蹟

ひ候ひし故、このほど御文拜し、入らざる事までも申し進じ
 候なり。

三日

大にい

別にくだらぬ事、三四枚したゝめつかはし候間、おとゝさま
 か、梅にいさまに読みよきやうに寫してもらひ候へ。少し
 は心得の種にもなり申すべく候。

さて御多用の中にも、手習讀物などは心がけ候へ。正月に
 は、一日は藪入出來申すべくや。どうぞ兄さまの御休日
 をえらび参り候て、心得になる話ども聞き候へ。わたくしも
 其の日わかり候はば、昔話なりともしたゝめて遣はし申す
 べく、又正月には、いづくにてもつまらぬ遊び事をするもの

貝原先生
 貝原益軒
 名は篤信
 儒者
 筑前國(福岡
 縣)福岡藩士
 正徳四年(一
 三七四)歿
 年八十五
 大和俗訓
 八卷
 教訓書
 家道訓
 六卷
 教訓書

に候へども、それよりは、何か心得になる本なりとも、讀みて
 もらひ候へ。貝原先生の大和俗訓家道訓などは、丸き耳に
 もよくきこゆるものに候。又、淨瑠璃本なども、心得ありて
 聞き候へば、ずるぶん役にたつものに候。
 さて又、別にしたゝめたる文につき、歌をよみ候間、こゝにし
 るし侍りぬ。

頼もしや誠の心かよふらん文みぬさきに君を思ひて
 右したゝめたるは、そもじを思ひ候より筆をとりぬるが、そ
 の夜そもじの文の到來せしは、定めて誠の心の文より先に
 参りたるにやと、いと頼もしくぞんじ候まゝ、かくよみたり。

(吉田松陰全集第五卷)

大佛次郎
 本名野尻清彦
 小説家
 明治三十年生
 瑤泉院
 備後國(廣島
 縣)三吉藩主
 淺野長治の女
 淺野長矩の妻
 内匠頭
 淺野長矩
 播磨國(兵庫
 縣)赤穂藩主
 元祿十四年
 (一三六)歿
 年三十五
 淺野土佐守長澄
 安藝國(廣島
 縣)廣島の藩
 主淺野綱長の
 弟
 大學殿
 淺野長廣
 長矩の弟
 享保十九年
 (一三九四)歿
 年六十五

五 瑤泉院

大佛次郎

若くて夫内匠頭に死別した奥方は、黒髪をきり、實家の淺野
 土佐守長澄の屋敷に引取られて、貞淑な餘世を過してゐた。
 その花の盛りをあたら佛間にたれこめてゐる清らかな姿は、
 人々にいたゞしい感じを抱かせた。
 けれども、瑤泉院が男まさりのけなげな心の持主であつた
 ことは、昨年の松の廊下の異變を最初に聞いた時のことであ
 る。これを知らせて來たのは、今左遷されて安藝へ行つて
 る大學殿であつた。この大學殿は、兄が殿中でしたことを
 知ると、直ぐさま姉のところへこれ知らせに來た。大學殿
 がひどくあわててゐたのに、姉は靜かだつた。事の眞偽を知

らうとするもののやうに、暫く無言で大學殿の顔を見詰めてゐてから、最初にいつた言葉は、

「相手の方はどなたでしたか。またその方は、その場でお果てなさいましたでせうか。」

といふのであつた。

姉の冷靜な語氣は意外であつたし、狼狽してゐた大學殿は、實際にそこまでの詳しいことを知らなかつたので、

「私はたゞ、御老中からお沙汰があつたので、屋敷の者が騒がぬやうに取急いで駈けつけてまゐつたわけ……」
と、辯解らしくいふと、

「おなさないことでございます。あなたさまの實のお兄さまのことではございませんか。」

と、たしなめた。

瑤泉院の美しい顔には、血の色がさしてゐた。優しいひとであるが、烈しい氣性が隠れてゐて、いざとなると、是非をきつぱりときめて、微温なことを許さなかつた。

實家へ移つてからの瑤泉院は、總べてを一つの意志で支配する生活に安住した。一旦嫁いだ以上は、夫と離れた自分の生活を考へられないのだつた。そこで、夫が地下に移つてもなほ加へてゐる制縛を、寧ろ喜ばしいものとして受けてゐるし、さうしてゐて何の不自由も感じないのだつた。

夫人のこの物靜かな生活に、内藏助の亂行の噂がどんな波動を傳へたかを、側近の人々は知つてゐた。大學殿がこのひとの心から逐はれたやうに、内藏助もまた斥けられようとし

内藏助
大石良雄
赤穂藩士
赤穂義士の頭
領
元祿十六年歿
年四十五

てゐる。内藏助はこれを知つてゐたのかどうか、今度江戸へ来てからも、一般の世間に隠れてゐたと同様に、まだこちらへも何の挨拶もしなかつた。

十一月三十日になつて、はじめて落合與左衛門のところへ、内藏助から長文の手紙に書類を一束つけて届けて來た。瑤泉院についてゐる與左衛門に、奥方さまに御披露を願ふといふ、二十九日附の手紙であつた。

與左衛門が内藏助から來た手紙を持つてはひつて行くと、瑤泉院は佛間に朝のおつとめをしてゐるところだつた。風のない冬の冷たい静けさが、まだ薄暗い家の内にゆきわたつてゐて、沈んだ空氣の中に、數珠を揉むさら／＼といふ音が襖越しに聞えてゐた。與左衛門は袴を折つて、行儀正しく控へ

十一月三十日
元祿十五年十
一月三十日

て待つた。朝の疊の冷やかさが膝にのぼつて來て、すこし風邪をひいてゐた與左衛門に寒さを感じさせた。老人の與左衛門を氣の毒がつて、老女が布團を持つて音のしないやうにはひつて來て、それをすゝめてから、また影のやうに出て行つた。しかし、布團は、與左衛門のせまく固めた膝の脇に置かれたまゝになつてゐた。

澄んだ鉦の音が聞えた。侍女がはひつて行つて、與左衛門の來たことを傳へたらしく、爺かいといふ瑤泉院の聲がした。やがて、襖があいて、燈明のゆらめく佛壇の前から白い被布を著た身を起す姿が見えた。

「大層早く……」といった。與左衛門は、疊につきさうにさげてゐた顔をあげた。

「御覽に入れたきものがござりまして、まかり越しました。」
火桶が出る。「もつと炭を」と侍女にいひつけて、瑤泉院は、自分て火箸をとつて炭を直してから、與左衛門にすゝめた。

「今朝は大層冷える。」

「さやうにござりまする。 昨晚も雪を催してゐたやうに思ひましたが、降りませぬので餘計寒いやうにござりまする。」

與左衛門はかういひながら、手首にゆはへて持つて來て膝の前に置いてあつた袱紗包をほどいた。

太夫
大石良雄

「太夫から、手前へあててお手紙がござりまして、これを。」
といつて差出したのは、分厚い紙包の方である。

「御前へ差上げるやうなほ、手前より子細を申し上げるやうにとのこととてござりました。」

「内藏助から？」

瑤泉院は低くかういつた。 かういつた時、神々しいくらゐに沈んでゐた白い花のやうな顔に、微かな表情が動いて、影をさした。 これは、内藏助の爲に好意のあるものではなかつた。

「あの男は、今どこにゐますか。」

與左衛門は、この言葉に輕いさげすんだやうな響を聞いて、目をあげた。 その所作には、心中にある異議がひらめいてゐるやうに見えた。

瑤泉院は靜かに微笑した。 與左衛門は、膝を進めるばかりにして、言ひ出した。

「こちらにおいてになつてゐるやうに存ぜられまする。 が、どこはおつしやられぬと申すことにござります。 さて、御

前へ御披露申すことにござりますが……これは、手前の口より申し上げまするよりは、おそれながら、この手紙を御披覽願ひたう存じまする。

と、つゝんでゐる強い感動に心もち顫へてゐる手で、自分にあてて届いた内藏助の手紙を、瑤泉院の前へ差出した。

この間ずつと、與左衛門の様子を注意深く見まもつてゐた静かなまなざしは、疊の上の手紙に落ちた。この、ひつそりとした一瞬に、庭に日が差して來たらしく、障子の裾がぼつと明かるくなつた。

一筆啓上致し候。瑤泉院様ますく御機嫌よく御座な
さるべくと恐悦し奉り候。大學様御事、藝州へ御引取り
なされ、御氣の毒に思し召させらるべくと恐察し奉り候。

藝州
安藝國
現廣島縣の内

近頃は非に及ばざる次第に御座候。その後にはわざと差控へ、書狀を以て御機嫌相伺ひ申さず候。貴殿いよゝゝ以て無事お勤めなさるべく、珍重に存じ奉り候。

内藏助の手紙の冒頭は、かうであつた。瑤泉院は、次を讀んだ。去冬御意を得置き候通り、去春赤穂に於て預り候御金、去年以來、一儀の……一儀の……用事に差遣ひ申し候。様子委細帳面に相認め候通りに御座候。さる三月十九日より金銀米の拂等、矢頭長助勘定いたし、委細帳面に相認め、人別に請取手形等取り置かせ申し候。品々取集め、このたび一緒にこれを進じ候。

瑤泉院は、これまで讀んで、再び「一儀」の文字へ視線を返してゐた。何かしら、胸のしんからわいて來るものがあつた。

赤穂
現兵庫縣赤穂
郡赤穂町

矢頭長助
赤穂藩士
赤穂義士の一人
矢頭教兼の父

鼓動のはやまるのが感じられた。與左衛門がそつと膝を動かしたのが視野の外にぼんやりと感じられた。

山科
現京都市東山
區山科

右の餘り金、去年六月四日より拙者手前へ預り、山科へ持参仕り、段々拂ひ出し候趣、帳面に記し置き候。毛頭自分用事に遣ひ候儀、御座なく候。委細帳面御引合はせ御披見下さるべく候。小手形等も一緒に封じ置き候。右の趣苦しからず候はば、瑤泉院様へ委細御耳に立て下さるべく候。去冬、貴殿へ御約束申し候につき、書付品々、この度これを進じ候。

右預り候御金の内に、瑤泉院様御金の利銀、赤穂にて取集め申し候分、五貫目餘り御座候。段々一儀の用事に不足申し候につき、右の御金差遣ひ候間、この御金は私いづれ

も拜領仕り候同意に存じ奉り候間、いづれもへ下し置かれ候と思し召させられ下され候やうに、憚りながら宜しくお執成願ひ奉り候。委細帳面に相認め置き候間、長助仕置き候帳面に御引合はせ、一々御覽下され候はば、明白に相知れ申すことに御座候……

長い手紙であつた。

大野九郎兵衛の荷物を差押さへてあつたが、これは城主が變つたし、九郎兵衛が貧乏して困つてゐるので、渡してやることにしたといふことまで、こま／＼と認めて、この多事の時にあつてなほ疎かにしなかつた公金の出入を、一々請取をつけて出所を明らかにしたものだつた。それよりも、最後に「追伸」として認められてあつた。

大野九郎兵衛
赤穂藩士

冷光院
長矩の戒名

このたび申し合はせ候忠士の者ども都合五十人御座候。冷光院様御靈魂御照覽に相叶ひ候へかしと存じ奉り候。までに御座候。

といふ、何でもないことのやうに書いてある一項を讀んだ瑤泉院は、急にその手紙に顔をうづめた。眉がこまかくふるへてゐるのを、與左衛門が見た。

白い頬に涙の痕が光つてゐる。與左衛門が平伏してゐる間に、さわやかなきぬずれの音が立つて、佛間の方へ行つた。顔をあげると、佛前にぬかづいてゐられるのが見えた。

(赤穂浪士)

佐藤春夫
詩人 小説家
明治二十五年

森鷗外

名は林太郎
小説家 翻譯家

文學博士

醫學博士
陸軍軍醫總監

帝室博物館總
長兼圖書頭

當時第二軍軍
醫部長

大正十一年歿
年六十一

うた日記

明治三十七八
年戰役從軍中

に成つた日記
體の陣中詩歌

集
明治四十年刊

六 機

佐藤春夫

森鷗外の「うた日記」中に「石田治作」といふ詩がある。石田治作は、感状を受けた下士卒が司令部附になることとなつた時、軍醫部長の從卒としてまはされた者であつた。詩は鷗外と新從卒との對話によつて出來てゐる。

先づ、鷗外は石田をして彼が感状を受けた由來を語らせる。石田は沙河會戰中、十月十二日午前十一時、十里河の南方、右岸から攻撃して來た敵の砲兵陣地前七百メートルのところから、突撃の命によつて進んだ某大隊の左翼中隊の左翼分隊の一員であつた。彼が敵の陣地に接近した頃には、身方から離れて、身方の正面に銃丸を後から雨と浴びるやうな形にな

沙河會戰
 明治三十七年
 十月沙河（現
 滿洲國奉天省
 内、奉天の南
 方に在る）附
 近に於て日本
 軍がロシア軍
 を破つた戦
 十里河
 現奉天省内、
 沙河の南方に
 在る

り、死は決してゐるのだから、同じ死ぬならば敵の陣地まで往つて死にたいものと、石田は眞先に進んで、三人の敵が陣地を捨てて逃げるのを認めた。外に残つてゐた二人の敵のうち、一人は砲に霰弾を籠めてゐる最中、もう一人は馬をひきよせて左手をその取毛にかけ、今や馬に跨がつて逃げようといふところ。石田は、先づ、弾を籠めてゐた一人を銃丸で殺し、その銃を取り直して、馬で逃げようとしてゐる者の方へ銃剣をつきつけ、劍尖が偏足かたあしを、鎧にかけてゐた將校の外套に觸れるばかりになつた時、かの將校は身を翻して拳銃を右手に持ち、進まんとする石田の胸に擬した。石田は、全身の力を銃を握る兩手に籠めて用意をした。この刹那、敵の將校は何と思つたか、拳銃を握つてゐた右手をも項をも垂れたので、石田も躊躇

してゐると、將校は拳銃を投げ捨てて石田の右手を確と握つた。かくて、石田の擒にしたのは砲兵の大尉で、石田の銃に打たれて死んだのは少尉であつた。遺された四門の砲は、我が中隊の捕獲品となつた。

これが、自ら語る石田治作の手柄である。詩はまだつゞいて、眼目は後の方にあるのだが、今までのところだけでも、複雑な緊張し切つた活動的な光景を、まるで爲方話よりもあざやかにくつきりした形に見せて、その刻々に動く動作と力とをさへ見せてゐる筆力は及ぶべくもないもので、熟讀し凝視するほど味を加へる。散文になほしてみた拙文などでは、到底その一端をも表現し得てゐないから、無念ながら彼の砲兵大尉の如く、筆者も秃筆を投げ出してしまつて、全篇をこゝに引

用する外はない。

感状を

受けし下士卒

司令部に

つけられし時

静岡の

石田治作は

わが許に

從者として來ぬ

戦の

さまを問へども

すなほなる

性にしあれば

はなじろみ

容易く言はず

強ひられて

やうやく開く

つくろはぬ

口より出でし

飾なき

ことばに曰く

十月の

沙河會戦の

一

五

一〇

十二日

午前十一時

十里河の

右岸より撃つ

砲兵の

陣地に向かひ

責め寄せし

我が大隊の

迎り來し

凹地を出でて

南邊みなみへの

岸に近づき

陣地前

七百めえとる

撃つ砲を

認め得し比

突撃の

命は下りぬ

幸ありて

わが屬せりし

大隊の

左翼中隊

中隊の

左翼分隊

二〇

一五

いちはやく 河を渡りて
 めざしたる 陣地まぢかく 二五
 寄るほどに 身方と離り
 正面の 我が銃丸は
 うしろより 雨とふりきぬ
 かねてより 死をば決しつ
 陣地まで 往きて死なんと 三〇
 眞先に わが進むとき
 敵みたり 逃るる見えぬ
 残りにし ひとりは砲に
 霰彈を 今ぞ籠めたる
 又ひとり 馬ひきよせて 三五

ゆん手をば 取毛にかけつ
 わが放つ 銃に中りて
 丸こめし ひとり僵れぬ
 わが持たる 銃劔の尖
 偏足を 鐙にかけし 四〇
 將校の 外套にこそ
 あやふくも 觸れんとしたれ
 將校は 身を翻し
 拳銃を めてにとりもち
 進むわが 胸に擬したり 四五
 銃握る わがもろ手には
 身のうちの 力籠れり

此の刹那

何思ひけん

將校の

拳銃とれる

右手垂れて

項も垂れぬ

おもほえず

われためらへば

將校は

拳銃すてて

わが右手を

しかと握りぬ

かくてわが

擒にせしは

砲兵の

大尉とぞいふ

霰弾を

籠めてえ撃たず

討たれしは

少尉と知りぬ

遺されし

四門の砲は

中隊の

えものとなりぬ

五五

五〇

我が敵は

撃つべき手中の

六〇

拳銃を

など撃たずして

棄てけんと

治作語りぬ

聽け治作

そのよし告げん

かねてより

死を決したる

汝こそ

撃たせて刺さめ

六五

生くる道

求むる敵の

刺されつつ

いかでか撃たん

一寸ちの

髪だに容れぬ

勝敗の

機はここにあり

おしなべて

軍もしかなり

七〇

國もしかなり

ぼんやりした頭では作ることは愚か、讀むことさへ出來ない。しかし、決して混濁して晦澁なのではない。文の構成が複雑なのである。

説明の便宜上五行づつに分けて置いた。最初の二十行位までは一讀してわかる通りである。たゞ「十月」「十二日」「午前十時」「沙河會戰」などの報告的な文字が面白く用ゐられてゐるのを見るだけである。これは二〇―二五の間の「大隊」「中隊」「分隊」「左翼」などの用法と照應してゐる。手法全體も、同様な機械的な手法によつてゐる。「幸ありて わが屬せりし」などもその一例だが、更に、左翼中隊の左翼分隊がいち早く河を渡つて、目ざした陣地まぢかく寄る程に、――著しく前進したために、身方の正面の銃丸が雨とふり來るといふ句法は、飽くまで理

智的なものである。更に、三〇―三五の間では、先づ、敵が三人逃げて、あとに、ひとりは砲に霰彈を籠め、ひとりは馬をひきよせてゐると、逃げた三人の外の二人はひとりづつ別に述べて、しかも、ひとりづつは片づけてしまはず、ひとりが砲に彈を籠めてゐる間にひとりは馬をひきよせて取毛に手をかけてゐるといひ、わが放つ銃に中つて彈籠めしひとりが僵れてしまつて後、わがもたる銃劍の尖が、偏足を鐙にかけし將校の外套に觸れんとするといふ。あつちにもひとり、こつちにもひとり、或は彈を籠めてゐたり、或は馬の取毛に手をかけてゐたり、或は僵れたり、或は偏足を鐙にかけたり、敵が一體幾人ゐるのかと疑はれさうだが、結局ふたりなのである。彈を籠めてゐたひとり、わが銃に中つて僵れたひとりとは同一人で、馬の

取毛に手をかけてゐたひとり、次ぎに偏足を鐙にかけてゐるのとは同一人で、取毛に手をかけてゐたのが次の瞬間にはもう偏足を鐙にかけてゐただけで、この一瞬々々を別々に述べてゐるのは、正にフィルムの一コマ／＼を見ると同じ道理で、ひとりが討たれてゐる間に、馬をひきよせてゐたひとりは逃げ支度を一層進めてゐた活動が、言外に現されてゐるわけである。同様に、石田の活躍にしても、わが放つ銃に中つてひとりが僵れたと読みも終らぬうちに、わが持たる銃劍の尖がもう偏足を鐙にかけし將校の外套にあやふく觸れようとしてゐる。一挺の銃が二挺のやうに使はれてゐるのは、早い活動の表現なのである。これ等の句法があるからこそ、身を翻して拳銃を右手に取持つたり、それを胸に擬してゐたのを投

げ捨てて相手の右手を確と握つたりする動作も、垂れた右手や項も、活躍したのものとして眼前に映じて来る。故意に、一度敵の人数などで多少の混乱を感じさせて、それを理解する用意を讀者の頭に要求して置いて、その了解に應じて同じ筆法で活躍的な開展を示す一句々々をどこまでも理智的に得心づくでうなづかせて、うなづかない限りは話は運ばない形になつてゐる。鷗外はこのあたりの手法に於て、日本語に新しいニ・アンスを興へることに成功してゐる。しかし、こんな方法とても、たゞの意地悪な一時の試みを物好きでやつてゐるのではなく、それには、無論それ相應の必要があるからである。といふのは、この作の主題たる「聽け治作」そのよし告げん以下は理性にうつたへなければならぬものだから、その

本題に入る前に理性の活動を豫め刺激して置いたわけで、これ等の微妙さは飽くまでも表現の有機的機構に因るものである。

思はぬ長談義になつたが、この詩の主題たる「聽け治作以下のかねてより 死を決したる 汝こそ 撃たせて刺さめ 生くる道 求むる敵の 刺されつつ いかでか撃たん 一すぢの 髪だに容れぬ 勝敗の 機はここにあり おしなべて 軍もしかなり 國もしかなり」とある、この凜乎たる氣魄を示した鷗外の教を、石田治作は何と聞いたかは知らないが、筆者は「軍もしかなり」「國もしかなり」の次に、更に一句「人もしかなり」が餘してあるのを感じて、この教こそ、鷗外がこの時、從卒石田の質問のために答へただけのものではなく、鷗外自身、

その平素から抱懷し實踐してゐた精神の片鱗のやうに思へる。さうして、全軍に向かつては道義的要素を力説し重大視した鷗外が、軍の否、いつも個々の人間に對してはこの精神を要求してゐたのではないかと思ふ。ひとり人間に對してだけではなく、乘馬に對してさへかうであつた。――

隱沼にふみこみし足えもぬかて草はむ駒をに
くみけるかな

と、この精神のだらけた乘馬に對するにくみを表現した一首の實感に充ちてゐることを見ても、それを知ることが出来る。

(陣中の堅琴)

七 榾火

小林一茶

小林一茶
名は信之
俳人
信濃國(長野
縣)の人
文政十年(二
四八七)歿
年六十五

白歌を聞きく竝ぶ燕かな
春風やからりと乾く流しもと
霞む日や夕山かげの笛の笛
山の月花ぬすびとを照らし給ふ
花御堂月も上らせ給ひけり
麥秋や子を負ひながら鬪賣
大螢ゆらりくと通りけり

蟻の道雲の峯よりつゞきけり
帷子の青空色や朝參り
秋立つや峯の小雀の門なる
仰のけに落ちて鳴きけり秋の蟬
初藏の蔭の小家も月見かな
藁すぎる人や夕霧吹きかゝる
子實がきやらく笑ふ榾火かな
これがまあつひの栖か雪五尺

高村光太郎
詩人 彫刻家
明治十六年生

八 小刀の味

高村光太郎

飛行家が飛行機を愛し、機械工が機械を愛撫するやうに、技術家は何によらず、自分の使用する道具を酷愛するやうになる。われわれ彫刻家が、木彫の道具、殊に小刀を大切にしまるで生き物のやうにこれを愛惜する様は、人の想像以上であるかも知れない。幾十本の小刀を所持してゐても、その一本一本の癖や調子や能力を事こまかに心得て居り、それが今現にどうなつてゐるかをいつでも心に思ひ浮かべることが出来る仕事をする時に當つては、殆ど本能的に、必要に應じてその中の一本を選びとる。前に並べた小刀の中から或一本を選ぶにしても、大抵は眼で見るよりも先に指さきぎが、その小刀の柄

に觸れて、それを探りあてる。小刀の長さ、太さ、圓さ、重さ、つまり手觸りて自然とわかる。ピアニストの指が、まるでひとりでのやうに鍵をたたくのに似てゐる。桐の道具箱の引出の中に並んだ小刀を、一本づつ丁寧に、洗ひぬいた軟らかい白木綿で拭きながら、かすかに錆どめの沈丁油の匂をかぐ時は甚だ快い。

わたくしの子供の頃には、小刀打の名工が二人ばかりゐて、彫刻家仲間に珍重されてゐた。切出きりだの信親、丸刀ぐらんちの丸山。切出といふのは、鉛筆削などに使ふ、斜に刃のついてゐる形の小刀であり、丸刀といふのは、圓い溝の形をした突いて彫る小刀である。當時普通に用ゐられてゐた小刀は、大抵宗重といふ銘がうつてあつて、これは大量生産されたものであるが、信

親丸山などになると數が少いので、高い價を拂つて争つてやつと買ひ求めたものである。これは、例へば東郷鋼はがねのやうな既成の鋼鐵を用ゐず、極めて原始的な玉鋼たまはがねと稱する荒がねを、小さな鞆で焼いては鍛へ、焼いては鍛へ、幾十遍も折り重ねて鍛へ上げた鋼を刃に用ゐたもので、研ぎ上げてから見ると、普通のもののやうにびか／＼とかきら／＼とかいふやうな光り方はせず、むしろ、少し白つぽく、ほのかに霞んだやうな、含んだやうな、靜かな朝の海の上でも見るやうな、底に沈んだ光り方をする。光を葆かくんでゐる。さうして、まつ平まつひらに研ぎすまされた面の中には、見えるやうな見えないやうなきめがあつて、軟らかであたゝかく、まるで息でもしてゐるかと思はれるけはひがする。同じさういふ妙味のあるうちにも、信親のは刃

金が薄くて地金が厚い。地金の軟らかさと刃金の硬さとは不可言の調和を持つてゐて、いかにもあく抜けた、品位のある様子をしてゐる。當時いやに刃金の厚い、普通のびかびか光る切出を持たされると、子供ながらに變に重くるしく、かちかちしてゐてうんざりしたことをおぼえてゐる。丸山のは刃金が厚いのであるが、これは丸刀である性質上、その厚いのが又甚だ好適なのであつた。

仕事場の板の間に座蒲團を敷き、前に研板を、向かふに研水桶を置き、さて靜かに胡坐をかいて膝に膝當をはめ、膝の下にかつた押さへ棒で、ほん山の合はせ砥を押さへて、一心にかういふ名工の打つた小刀を研ぎ終り、その切味の微妙さを檜の板で試みる時はまつたく楽しい。

九 藝 能

繪佛師良秀といふ僧ありけり。家の隣より火出て来て押蔽ひければ、大路へ出てにけり。人のかかする佛もおはしけり。又、物も打被かず。妻子などもさながらありけり。それをも知らず、身ばかり、たゞ一人出でたるを事にして、向かひのつらに立てりけり。

火はや我が家に移りて、煙焰くゆりけるを見て、大方さりげなげにて眺めければ、知音どもとぶらひけれども、少しもさわがざりけり。いかにと見れば、向かひに立ちて家の焼くるを見、うちうなづきくして、時々笑ひて、あはれ、しつる所得かな。年頃はわろくかけるものかなといふ。とぶらひに来れる者

不動尊
不動明王・無
動尊ともいふ
大日如來の化
身
五大明王の一

博雅三位
源博雅
醍醐天皇の皇
孫
從三位皇后宮
權大夫
管絃の名手
天元三年(一
六四〇)歿
年六十三
朱雀門
大内裏の南門

ども、こはいかに、かくては浅ましきことかな。物の憑き給へるかといへば、なでふ物の憑くべきぞ。年頃不動尊の火焰をあしうかけるなり。はや見取りたり。これこそは所得よ。此の道をたてて世にあらんには、佛をだによくかきたてまつらば、百千の家も出で來なんずるものを。わたうこそさせる能もおはせねば、物をも惜しみ給へ」といひて、あざ笑ひて立てりけり。

その後には、良秀がよぢり不動とて、人々めであへりけり。

博雅三位、月のあかかりける夜、直衣にて朱雀門の前に遊びて、夜もすがら笛を吹かれけるに、同じさまに直衣著たる人の笛吹きければ、誰人ならんと思ふほどに、其の笛の音、此の世に

たぐひなくめでたくきこえければ、あやしくて、近よりて見れば、いまだ見ぬ人なりけり。我もものいはず、彼もいふことなし。

かくのごとく、月の夜毎に行きあひて吹くこと夜頃になりぬ。彼の人の笛の音、殊にめでたかりければ、試みに彼ととりかへて吹きけるに、世になき程の笛なり。その後、なほく、月の頃になれば行きあひて吹きたれど、本の笛をかへしとらんともしはざりければ、ながくかへてやみにけり。

三位失せて後、帝、此の笛を召して時の笛吹どもに吹かせらるれど、その音を吹きあらはす人なかりけり。その後、淨藏といふめでたき笛吹ありけり。召して吹かせ給ふに、彼の三位に劣らざりければ、帝、御感ありて、此の笛の主、朱雀門のわたり

淨藏

三善清行の子
康保元年（一
六二四）歿
年七十四

御堂入道殿

藤原道長

攝政太政大臣

宇治殿

藤原頼通

道長の子

攝政關白太政

大臣

平等院

現京都府久世

郡宇治町に在

る天台・淨土

兼宗の名刹

永承七年（一

七二二）建立

京極殿

藤原師實

頼通の子

攝政關白太政

大臣

富家入道殿

藤原忠實

師實の孫

攝政關白太政

大臣

にて得たりけるとこそ聞け。淨藏、彼の所に行きて吹け」と仰せられければ、月の夜、仰せのごとくに彼處に行きて此の笛を吹きけるに、彼の門の樓上に、高く大きな聲にて、なほ逸物かなとほめけるを、かくと奏しければ、はじめて鬼の笛としろしめしけり。

「葉二」と名づけて、天下第一の笛なり。その後傳はりて、御堂入道殿の御物になりけるを、宇治殿、平等院を造らせ給ひける時、御經藏に納められにけり。

此の笛には葉二つあり。一つは赤く、一つは青くして、朝毎に露おくと言ひつたへたれば、京極殿御覽じける時は、赤葉落ちて、露おかざりけると、富家入道殿語らせ給ひけるとぞ。

都良香 漢詩人 漢學者
 文章博士 元慶三年(一五三九)歿
 年四十六、竹生島 琵琶湖の北隅に在る島
 竹生島辨財天を祀る寶嚴寺が在る
 羅城門 平安京の南門
 菅丞相 菅原道真 漢學者
 右大臣 延喜三年(一五六三)歿
 年五十九、十訓抄 三卷
 說話集 建長四年(一九一二)成る
 作者未詳

都良香、竹生島に参りたりけるに、眺望心にすみて、「三千世界眼前盡」といふ句を作りて、其の末を案じ得ざりければ、靈天託宣を下して、「十二因縁心裏空」と一句を加へ給ひけり。
 同じ人、羅城門を過ぐるとて、「氣霽風梳、新柳髮」と詠じたりければ、樓上に聲ありて、「氷消浪洗、舊苔鬚」とつけたりけり。良香、菅丞相の御前にて、此の詩を自讃し申しければ、下の句は鬼の詞なり」とぞ仰せられける。
 (十訓抄)

一〇 人道

翁常に曰く、人界にゐて、家根の漏るを坐視し、道路の破損を傍觀し、橋の朽ちたるをも憂へざる者は、即ち人道の罪人なり。

翁曰く、山芋掘は、山芋の蔓を見て芋の善惡を知り、鰻釣は、泥土の様子を見て鰻の居る居らざるを知り、良農は、草の色を見て土の肥瘠を知る。皆所謂、至誠神の如しと云ふものにして、永年刻苦經驗して發明するものなり。技藝に此の事多し、侮るべからず。

翁曰く、我が道は至誠と實行のみ。故に鳥獸蟲魚草木にも

翁 二宮尊徳 通稱金次郎 農政家
 相模國(神奈川県)の人
 安政三年(一八一六)歿 年七十
 至誠神の如し 中庸に見える 語

皆及すべし。況や人に於てをや。故に才智辯舌を尊まず。才智辯舌は人には説くべしといへども、鳥獸草木を説くべからず。鳥獸は心あり、或は欺くべしといへども、草木をば欺く

べからず。



二宮尊徳

夫、我が道は至誠と實行となるが故に、米・麥・蔬・菜・瓜・茄子にても、蘭・菊にても、皆之を繁榮せしむるなり。假令、智謀

孔明を欺き、辯舌蘇張を欺くといへども、辯舌を振るつて草木を榮えしむることは出來ざるべし。故に才智辯舌を尊まず、至誠と實行を尊ぶなり。古語に「至誠神の如し」と云ふといへども、至誠は即ち神なりと云

孔明 諸葛孔明
名は亮
支那三國時代の蜀漢の丞相
蘇張 蘇秦と張儀
蘇秦は東周、張儀は魏の人
共に支那戰國時代の論客

ふも不可なかるべきなり。凡そ世の中は、智あるも學あるも、至誠と實行とにあらざれば事は成らぬものと知るべし。

翁曰く、天理と人道との差別を能く辨別する人少し。夫、人身あれば欲あるは則ち天理なり。田畑に草の生ずるに同じ。堤は崩れ、堀は埋り、橋は朽つ、是、即ち天理なり。人道は私欲を制するを道とし、田畑の草を去るを道とし、堤は築き立て、堀はさらひ、橋は掛け替ふるを以て道とす。此の如く、天理と人道とは格別のものにして、天理は萬古變ぜず、人道は一日怠れば忽ちに廢す。されば、人道は勤むるを以て尊しとし、自然に任するを尊ばず。

夫、人道の勤むべきは、己に克つの教なり。己は私欲なり。

私欲は田畑に譬ふれば草なり。克つとは此の田畑に生ずる草を取り捨つるを云ふ。己に克つは我が心の田畑に生ずる草を削り捨て、取り捨て、我が心の米麥を繁茂さする勤なり。之を人道といふ。論語に「己に克ちて禮に復る」とあるは此の勤なり。

論語
四卷
經書
孔子の言行錄
四書の一

翁曰く、天道は自然なり。人道は天道に隨ふといへども、又人爲なり。人道を盡くして天道に任すべし。人爲を忽にして天道を恨むること勿れ。

夫、庭前の落葉は天道なり。無心にして日々夜々に積る。之を拂はざるは人道に非ず。拂へども又落つ。之に心を煩はし、之に心を勞し、一葉落つれば箒を取りて立つが如き、是、塵

芥の爲に役せらるゝなり。愚と云ふべし。木の葉の落つるは天道なり。人道を以て毎朝一度は拂ふべし。又落つとも捨て置きて、無心の落葉に役せらるゝこと勿れ。又人道を忽にして積り次第にすること勿れ。

愚人といへども、悪人といへども、能く教ふべし。教へて聞かざるも、之に心を勞すること勿れ。聞かずとて捨つることなく、幾度も教ふべし。教へて用ひざるも、憤ること勿れ。聞かずとて捨つるは不仁なり。用ひずとて憤るは不智なり。不仁、不智は徳者の恐るゝ所なり。仁、智二つ心掛けて我が徳を全うすべし。

翁曰く、夫、人道は譬へば水車の如し。其の形、半分は水流に

順ひ、半分は水流に逆らうて輪廻す。まるに水中に入れば廻らずして流るべし。又水を離るれば廻ることあるべからず。佛家に所謂知識の如く、世を離れ、欲を捨てたるは、譬へば水車の水を離れたるが如し。又凡俗の教義も聞かず、義務も知らず、私欲一偏に著するは、水車をまるに水中に沈めたるが如し。共に社會の用をなさず。

故に人道は中庸を尊む。水車の中庸は、宜しき程に水中に入りて、半分は水に順ひ、半分は流水に逆らひて、運轉滯らざるにあり。人の道も其の如く、天理に順ひて種を蒔き、天理に逆らうて草を取り、欲に随つて家業を勵み、欲を制して義務を思ふべきなり。

(福住正兄編「二宮翁夜話」)

福住正兄
尊徳の門人
報徳教の祖述
者
相模國の人
明治二十五年
歿 年六十九

一 勞働

内村 鑑三

内村鑑三
宗教家
昭和五年歿
年七十

働け、働け、報酬を得る能はずと雖も働け。若し報酬を得る能はずば、働きて報酬を得るの權利を得よ、然らば報酬は終に與へらるべし。又、憚らずして報酬を要求し得るに至るべし。報酬の約束せらるゝまで待ちては、事は成らざるべし、報酬は得られざるべし。

報酬は勞働に伴ふものなり。其の何時、何人に由つて與へらるゝかは、我等の關與する所にあらざるなり。

社會學者は言ふ、勞働は賃金を獲るための苦業なりと。宗教家もまた其の聲を受けて言ふ、勞働は心身の疲勞なり、休養

を以て之を償はざるべからずと。然れどもキリストは言ひ給ふ、労働は手を以て神の眞理を實得することとなり、直ちに神の宇宙に接することとなり、神と共に働くこととなり、故に至高純美の快樂なりと。

人の信仰は労働に關る彼の觀念を以て鑑識するを得べし。労働を忌み、卑しき、避くる者は不信者なり。之を好み、尊み、樂しむ者は信者なり。余輩は半生の實驗に由つて、斯く斷言するを憚らず。

農夫、樵夫、職工、正直なる商人等に懷疑あるなし。懷疑は學生、僧侶、文人等の中にあり。即ち、手を以て直ちに天然物に接することなく、多く室内に安坐して、宇宙と人生とに關し沈思

默考を凝らす者の中にあり。

懷疑は思想の過食より來る腦髓の不消化症なり。故に之を癒すの方法は、疑問の解釋を供するにあらずして、是等憐むべき坐食者をして、手を以て働かしむるにあり。

余輩は、机に寄りかゝりて宗教問題に煩悶する所謂懷疑者なる者に對し、些少の同情をも有せず。

信仰は信仰に由つて維持する能はず、信仰は労働に由つてのみ能く維持するを得べし。信仰は根にして、労働は枝なり。前者は養汁を供し、後者は之を消化す。枝葉無くしては、養汁は腐敗して毒素を醸す。労働なくしては、信仰は墮落して懷疑を生ず。信仰維持に必要なものは、より多くの信仰にあ

らず、手と脳とを以てする労働なり。

労働なくしては、肉體は飢ゑ、靈魂は死す。労働は肉體維持のため、のみ必要なものにあらざるなり。

信仰は神のために自己を棄つることなり。愛國は國のため、に自己を棄つることなり。自己を棄つるの點に於ては、信仰、愛國、其の揆を一にす。余輩は、嘗て神を信ずる者にして、國を愛せざる者あるを見ず、又眞に國を愛する者にして、神を信ぜざる者あるを知らず。人の愛國は其の信仰を以て知るを得べし。神の敵、國の賊は自己を中心とする者なり。

(内村鑑三全集第十二卷)

厨川白村

名は辰夫
英文學者 評

論家

文學博士

京都帝國大學

教授

大正十二年歿

年四十四

ニューイングラ

ンド

アメリカ合衆

國東北部六州

の稱

清教徒

十六世紀中葉

イギリスに起

つた新教派の

キリスト教徒

一二 米國の一面

厨川 白村

海のかなたに新しい理想郷を建てようとしてニューイングランドにわたつて來た清教徒は、たゞ夢幻の國に果敢ない理想の影を追ふやうな浪漫主義者ではなかつた。彼等には浪漫的な半面に、實行の世界、現實の生活に於ける絶えざる努力があつた。彼等は終始一貫、信念と實行とを結びつけなければ止まない奮闘の人々であつた。最初、新世界に移住して來た其の年の冬、凜烈な寒氣に惱まされて、彼等の多數は命を殞した。それにも屈せず、僅かな生存者は、生活の爲の悪戦苦闘を續け、其の子孫は爾後二三世紀を出でずして、先住の民を逐ひ、佛蘭西人と蘭人を同化し、西班牙人を驅逐し、遂には祖國

たる英國の羈絆をさへ脱するの偉業を成就した。そして、今も猶世界の各地から蝟集する新來の移住民を、同化するか、然らずんば之を驅逐せんとしつゝある有様だ。かくの如きは、一民族の活躍の歴史として實に驚くべき事實であつて、古代中世近代を通じて、世界史上未だ曾て比倫を見ない大業であつたといつても過言ではなからう。そして、能くこれを爲し遂げたものは、強烈な宗教的色彩を帯びた理想主義に伴なつた、清教徒の物質的努力と現實主義的精神とに外ならなかつた。詩人ロングフェローが歌つた「村の鍛冶屋」が「何か考へれば何か遂行した」もの、「かん／＼と叩く鐵砧かたしの上に一つ／＼の行爲と思想とが出来た」もの、皆今に至つて猶米國文明の特徴をなす所のものである。

ロングフェロー
アメリカの詩人
1807—1882

十七世紀の米國清教徒が奮闘の物語は、今にして思へば、ただ一篇の建國神話に過ぎないかも知れぬ。しかし、最も雄辯に米人の特色を語るものは、即ち此の神話である。

今から半世紀前、南北戦争までは、ニューイングランドの地が米國文明の中心であり、また嚮導者であつた。其の後、西部と南部との政治經濟上の勢力が急激に増大すると共に此の中心は失はれたが、其の古い宗教的理想主義は、今猶依然として米國全體を支配してゐる。

アングロサクソンの移住民が十七世紀の昔に祖國から齎して來た古いものが、星移り物變る三百年の間に、いつか本國の英國では滅びて、却つて米國に残つてゐるのは面白い。ミルトン時代の堅苦しい思想が、今猶米國文明の裏面に潜在し

南北戦争
奴隸存廢問題
に關してアメ
リカ合衆國南
部諸州と北部
諸州との間に
起つた内亂
1861—1865

アングロサク
ソンの
イギリス國民
の主系をなす
民族
ミルトン
イギリスの詩
人
1608—1674

スコットランド
イギリス大ブ
リテン島の北
部
イングランド
大ブリテン島
の南部
北カロライナ州
アメリカ合衆
國中部大西洋
沿岸の一州
テンネッシー州
北カロライナ
州の西に在る
ケンタッキー州
テンネッシー
州の北に在る
チヨールサー
イギリスの詩
人
1340頃—1400

てゐるが、之に似たことは他にも尠くない。言語の上などに
も、英國では今日既に廢れた古い語法が、今の米人の日常語の
なかに存してゐる。米國の片田舎の山奥に今も猶聞かれる
樵夫きこりの歌のなかに、スコットランドやイングランドの古い
歌謠があるといふ話だ。例へば、北カロライナ州から西の方
テンネッシーケンタッキー州に互る一帯の山嶽重疊の地方
には、十七世紀頃から近頃まで殆ど二百萬の移住民が、他との
交通少く、恰も桃源郷のやうに隔離された孤立の状態にあつ
た。此のあたりには、英國の古謠が口から口へと語り傳へら
れて現存し、またチヨールサー時代の言葉で、今はもとの英國で
廢語になつてゐるものが、日常語に用ひられてゐる例が少く
ないと聞いてゐる。

ボストン
アメリカ合衆
國マッサチュ
ーセツツ州の
首都
コンコード
同州の都邑
エマソン
アメリカの詩
人・哲學者
1803—1862
ワイマー
ドイツ中部の
都市
ゲーテの舊居
がある
ストラトフォード
オン・エヴォ
ン
イングランド
中部の都邑
シェイクスピ
アの舊居があ
る

殊に十七世紀頃の英國からの移住者には、門地高く、教養も
あり學問もある人が多かつた。かういふ人たちの文庫には、
神學・宗教の書物が多かつたといふのにも深い意味がある。
米國黄金文明の陰に、十七世紀以前の古い英國があることを
思はなければ、あの大きな謎の國を理解することは出来ない。
私がボストンの郊外に居たとき、或日、コンコードの地に哲
人エマソンの舊居を訪うた。友が示す案内記に、「コンコード
は獨逸のワイマーや英國のストラトフォード・オン・エヴォン
程に俗化してはゐない」とあるのを讀んで、見物嫌ひの私も心
を動かされたのであつた。青葉の蔭なつかしき五月の半ば、
昔清教徒が耕した麥隴菜畝の間を行くこと數里、コンコード
のとある旗亭に憩ひ、所謂「ニュー・イングランドの質素」を想は

ソロー
 アメリカの文
 學者
 1817—1862
 ホーソーン
 アメリカの小説家
 1801—1864
 シカゴ
 アメリカ合衆
 國イリノイ州
 の首都
 ニューヨーク
 アメリカ合衆
 國ニューヨーク
 州の首都
 ワシントン
 アメリカ合衆
 國の首府
 ケンブリッヂ
 セーレム
 ともにマッサ
 チューセッツ
 州の都市

せるやうな田舎料理を味はつて後、緑滴る森の木の間を流れる小川のほとりに古風な馬車を走らせた時ばかりは、米國にもこんな所があるのかと思つた。そして高邁な識見を以て世界を動かした思想家エマソンの家を見、森林生活の讚美者ソローが筆を執つた池のほとりをさまよひ、去つてまた小山のほとりにホーソーンの墓に詣でて、私は美しい夢のやうな半日を過した。シカゴやニューヨークやワシントンは、たゞ纒かに米國の一面を語るに過ぎない。ボストン郊外のケンブリッヂ、コンコード、さてはまた清教徒に最も縁の深いセーレムの町などを訪うて、はじめて米國文明の奥に潜む理想主義の面影を見ることが出来るのだと、私は其の時しみじみ感

(印象記)

與謝野晶子
 歌人
 明治十一年生

一三 人生の本流

與謝野晶子

流行といふものは上げ潮に似たものである。それはよい物を浮かべても来るが、芥や泥のやうなつまらない物をも浮かべて来る。人間は一面に好新性や獵奇性を持つてゐるので、流行に引附けられ易く、流行が浮かべて来る物は、たとひそれが過去の蹈襲でも、一應は新味のある物のやうに感じて、心を躍らせる。さうして、一部の人達が、新しい流行品は總べてが確かな實質的價値を具へてゐるかの如くに錯覺し、盲從する。その上に、現代の人間は、何事にも高速度性を欲して、氣短になる傾向を持つてゐるのと、目前の現實の狭い一點にのみ著眼し、四方上下を見廻すだけの餘裕が乏しいのとで、とかく

流行に自己を任せて反省するところがない。随つて、流行として自分の前に現れたものを、何でもかでも絶対最上の存在にまで祭り上げて禮拜する。

併し、流行は要するに上げ潮である。その満潮時の勢は素晴しいけれども、きつとそれに次いで干潮時が來ずにはゐない。若し、流行が人間に役立つ物を浮かべて來れば、それ等の物は採收されるが、芥のやうな無用な物は、やがて干潮が忘却の沖へ持つて行つてしまふ。或物は、不用のままに、磯の貝殻のやうに残されるにせよ、誰もそれを珍重して拾ふ者は無い。よい流行に出會つた者は幸であるが、大抵の流行には浮遊する芥のやうな物が多いのであるから、その芥を無上の寶のやうに思つて抱き上げた者は、流行の過ぎ去つた後で、自ら啞然

たらざるを得ないであらう。

人間生活の過程は、流行が全部でない。流行は、社會の表面を去來する一つの流れに過ぎない。その下には、人間生活の大きな本流が、悠々と前進してゐる。それは、國民性を河床としつゝ、自國の傳統文化と世界の文化とを混融した大河の流れである。それは、流行の齎すよい物を攝取して自らを豊富にはするが、容易に流行の悪質な浮遊物によつて攪亂されることはない。

流行思想の満潮時を見ると、天下を席卷しさうな勢であるけれども、流行に乗つて妄動する人間は實は一部分であつて、大多數は流行を批判する餘裕を持ち、もつと底力のある本流の生活——基本的實質的の生活をしてゐる。それ等の人達

は、流行を必ずしも冷眼に見ず、その魅力に引附けられもし、流行の中に含まれる美點を参考もし採用もするが、流行と終始するには至らないのである。又、三年や五年で消えて行く流行は、長い生活史から見れば、何でもないのである。

一時の流行に盲従する者は、永久に續く生活の本流に加ることを得ないで、泡のやうな假りの存在に終始する外はない。流行を追うて、時代の尖端を行くと思つてゐる人達の道は、あぶない極みである。眞實な人生は流行の外にあることを知らなくてはならない。

(街頭に送る)

吉村冬彦

本名寺田寅彦

物理學者

隨筆家

理學博士

東京帝國大學

教授

帝國學士院會

員

昭和十年歿

年五十八

祖母

名は政

明治二十二年

歿 年七十四

文化十二年

二四七五年

光格天皇の御

代

歿後四十六年の

今日

昭和十年

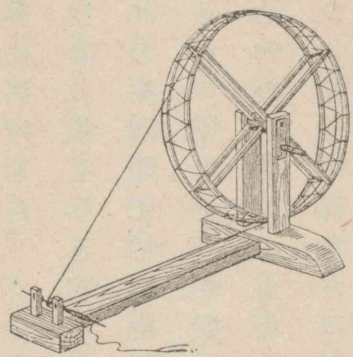
一四 絲車

吉村冬彦

祖母は文化十二年生まれで、明治二十二年、自分が十二歳の暮に病歿した。この祖母の、思出の畫像の數々のうちで、一番自分に親しみと懐かしみを感じさせるのは、昔の我が家の煤けた茶の間で絲車を廻してゐる、袖無羽織を著た老媪の姿である。紋附を著て撮つた寫眞や、それをモデルにして描いた油繪などを見ても、なんだか本當の祖母らしく思はれないが、たゞ記憶の印象だけに残つてゐるこの「絲車の祖母像」は、歿後四十六年の今日でも、實に驚くべき鮮明さをもつて随時に眼前に呼び出される。

祖母の使つてゐた絲車は、その當時でも、すつかり深く煤色

に染まつた、いかにも古めかしいものであつた。恐らく祖母の嫁入道具の一つであつたかも知れない。或は又、曾祖母の使ひ馴れたのを大切に持ち傳へたものであつたかも知れない。とにかく、祖母は自分の家に嫁いでからの何十年の間に、この絲車の把手を、恐らく何千萬回、或は恐らくは何億回か廻したことであらう。自分も子供固有の好奇心から、何度か祖母に教はつて、この絲車で絲を紡ぐ眞似をした記憶がある。綿を「打つた」のを直径約一糎、長さ約二十糎の圓筒形に丸めたものを、左の手の指先で撮んで持つてゐる。その尖端の綿の纖維を少しばかり引き出し



絲 車

て、それを絲車の紡錘の針の尖端に巻きつけておいて、右手で車の把手を適當な速度で廻すと、紡錘の針が急速度で廻轉して綿の纖維の束に撚りをかける。撚りをかけながら左の手を引き退けてゆくと、見る／＼指頭に撮んだ綿の棒の先から細い絲が発生し延びてゆく。左の手を伸ばされるだけ伸ばした所で、その手を舉げると共に右手で車を少し逆に廻轉して、今出来上つただけの絲を紡錘に巻き取る。さうしておいて、再び左手を下げて、絲を紡錘の針の尖端にからませて撚りをかけながら、新たな絲を引き出すのである。大概、車の把手を三回廻す間に左の手が伸び切つて數十糎の絲が紡がれ、それを巻き取つてから、また同じ事を繰返す。

さういふ操作の爲に、絲車の音に特有なリズムが生ずる。

それを昔の人は、「ビーン、ビーン、ビーン、ヤ」といふ言葉で形容した。把手の一廻轉が「ビーン」で、それが三回繰返された後に「ヤ」の所で車が逆に廻轉して絲が巻き取られるのである。「ビーン」の部で、鐵針とそれにつながる絲とが急速な振動をしてゐる爲に、一種の樂音が發生するが、巻き取る時はさうした振動が中止するので、音の休止が來るわけである。要するに、この四拍子の、凡そ考へ得らるべき最も簡單なメロディーが、絲車といふ「樂器」によつて奏せられるのである。そのメロディーは實に昔の日本の婦人の理想とされた、限りなき忍従の徳を讚美する歌を歌つてゐたやうなものかも知れない。

一年か二年位、裏の畑に棉を作つたことがあつた。當時子供自分の眼に映じた棉の花は實に美しいものであつた。

郷里
高知市

花冠の美しさだけでなくて、花萼から葉から莖までが、言葉では云へないやうな美しい色彩の配合を見せてゐたやうに思ふ。花時が終つても、^もが實のつて、やがてその蒴が開裂して純白な綿の團塊を吐く。うすら寒い秋の暮に、祖母や母と一緒に、^て手々に味噌漉を提げて棉畑へ行つて、その收穫の楽しさを樂しんだ。少し薄暗くなつた夕方でも、この眞白な綿の團塊だけがくつきり畑の上に浮き上つて見えてゐたやうに思ふ。さういふ時、郷里で「あを北」と呼ぶ秋風が、すぐ側の竹藪を戦がせて棉畑に吹きおろしてゐたやうな氣がする。

採集した綿の中に包まれてゐる種子を取除く時に、「みくり」と稱する器械にかける。これは云はば簡單なローラーであつて、二つの反對に廻る檜材の圓筒の間隙に棉の實を食ひ込

ませると、綿の繊維の部分が食ひ込まれ食ひ取られて向かふ側へ落ち、堅くてローラーの空隙を通過し得ない種子だけが裸にされて手前に落ちるのである。面白いのは、このローラーが全部木製で、その要部となる二つの圓筒が直径一糎半位であつたかと思ふが、それが片方の端で互に噛み合つて反對に廻るやうに、そこに螺旋溝が深く掘り込まれてゐた。昔の木工がよくもかうした螺旋を切つたものだ、一寸不思議なやうにも思はれる。尤もこの噛み合はせがかなりぎしぎしと軋るので、その減摩油としては、行燈のともし油を綿切にしまして時々急所々に塗りつけてゐた。それで把手を廻すと同じリズムでキュル／＼／＼と一種特別な轆音を立てるのであつた。「みくり」を通過して平たくひしやげた綿の斷片

には種子の皮の色素が、薄紫の線條となつてほのかに附著してゐたと思ふ。

かうして種子を除いた綿を集めて、綿打を業とするものゝ家に送り、そこで絲車にかけるやうに仕上をして貰ふ。この綿打作業は一度も見たことはないが、話に聞いたところでは、鯨の筋を張つた弓の絃で綿の小團塊を根氣よく叩いて、叩きほごして、その繊維を一度空中に飛散させ、それを沈積させて薄膜状としたのを、巻紙を巻くやうに巻いて圓筒状とするのださうである。さうして出來た綿の圓筒が、絲車にかけて紡がれるわけである。

田舎道を歩いてゐると、道脇の農家の納屋の二階のやうな處から、この綿弓の絃の音が聞えてくることがあつた。それ

が矢張四拍子の節奏で、パン／＼／＼、ヤといふ風に響くのであつた。恐らく、今ではもう何處へ行つてもめつたに聞かれない、田園の音樂の一つであらうと思はれる。

祖母の紡いだ絲を紡錘竹からもう一遍四角な絲繰棒に巻き取つて「かせ」に作り、それを紺屋に渡して染めさせたのを、手機たばたに移して織るのであつた。裏の炊事場かまやの土間の片隅にこしらへた板間に、手機が一臺置いてあつた。母がそれに腰をかけて「ちゃん／＼ちやきちゃん」といふ、これも亦四拍子の拍音を立てながら織つてゐる姿が、ぼんやりした夢のやうな記憶に残つてはゐるが、自分が少し大きくなつてからは、もうこの機は餘り使はれなかつたらしい。併し、自分の姉の家では、その老母がずつと後まで、自分等の中學時代までも、この機

織を唯一の楽しみものやうにして續けてゐた。木の皮を煮てかせ絲を染めることまで自分でやるのを道樂にしてゐたやうである。純粹な昔風の所謂草木染で、化學染料などは此の老人の夢にも知らぬ存在であつた。此の老人の織つた蒲團地が今でもまだ姉の家に残つてゐるが、その色がちつとも褪せてゐないと云つて甥が感歎して話してゐた。

化學的藥品より外に藥はないやうに思はれた時代の次には、昔の草根、木皮が再びその新しい科學的の意義と價值とを認められる時代が、そろ／＼めぐつて來さうな傾向が見える。いよ／＼その時代が來る頃には、或は草木染の手織木綿が最も新しい流行趣味の對象となるといふ奇現象が起らないとも限らない。

昔の下級士族の家庭婦人は、絲車を廻し手機を織ることを少しも恥づかしい賤業とは思はないで、つましい誇とし、或は寧ろ最大の楽しみとしてゐたものらしい。ピクニックよりもダンスよりも、この方が遙かに身に沁みて、本當に面白いであらうといふことは、物を作り出すことの喜を解する人には想像が出来さうである。

この絲車の追憶につながつてゐる子供の頃の田園生活の思出は、本當に絲車の紡ぎ出す絲の如く盡くる所を知らない。さうして、こんなことを考へてゐると、自分がたま／＼田園の自然の間に育つたといふことが、世にも仕合はせな運命であつたかのやうな氣もしてくるのである。

(絲車)

絲車
寺田寅彦全集
第五卷所収

福澤諭吉

幕末・明治の
先覺者

慶應義塾創設
者

明治三十四年
歿 年六十八

福澤百助

中津藩士

天保七年(二
四九六)歿

年四十五

中津藩

豊前國(大分
縣)中津藩

奥平氏の封土

大阪堂島の藩邸

現大阪市北区

堂島に在つた
藩の倉屋敷

野本雪巖

名は晃

儒者

天保五年歿
年七十四

一五 大父の形見

福澤諭吉

汝等の大父福澤百助君は、舊中津藩の士族にして、年二十四歳の時より公用を以て大阪堂島の藩邸に住居し、我等の兄弟姉妹五名は共に大阪に誕生し、大父君は年四十五、該邸に於て長逝し給へり。君幼少の時より學を好み、同藩の野本雪巖先生及び豊後の帆足萬里先生に従學して、頗る才名あり。獨り才學を以て文名を地方に専らにするのみならず、其の天稟温良にしてよく物を容れ、思想磊落にして私徳極めて方正、常に人の爲に畏憚せられたりといふ。君の長逝は今を距ること四十餘年、余は不幸にして其の容貌をも、知るに由なしと雖も、在世中の言行は、これを汝等の大母に聞きて詳かならざるは

豊後 豊後國
現大分縣の内
帆足萬里
儒者
豊後國(大分
縣)日出藩士
嘉永五年(二
五二)歿
年七十五

なし。

大父君大阪に住居の時、好んで古錢を集めて楽しみと爲せり。當時大阪の通用錢は、今の銅錢即ち青錢なるものを一文



福澤諭吉

と唱へ、九十六文を錢緡ぜにざしに貫ぬきてこれを九六の百文と名づけ緡のまゝに用ひたることにて、これを受授するの際必ずしも錢の數を數へず、凡そ緡の長短を一見するのみにして、假令或は一二文の過不足あるもこれを問ふものなく、又世間一般に於ても、殊更に緡の錢を減じて利を貪るが如き奸詐は稀なりき。或日、大父君九六の錢緡二三條の内より

古錢幾文づつかを選び出してこれを取り、其の餘は又緡に貫ぬきて舊の如くなし、これを放却して家人に告ぐるを忘れて外出し、日暮家に歸りて錢緡の所在を聞けば、豈計らんや、家人は其の錢を九六の全緡と思ひ、當日魚の代に拂ひ渡したりといふ。

大父君獨り大いに驚き、其の肴屋の名を聞けば、生憎、平日出入りの者に非ずして、家内婢僕に至るまでこれを知るものなし。君の憂慮益甚だしく、乃ち家人のぢかに魚屋に接したる者を召し、其の年齢容貌の大概より衣服荷物、天秤棒の様子に至るまでも逐一聞きて詳かに記し、竊かに藩邸の仲仕を雇ひ、堂島に來る肴屋とあれば必ず安治川か雜魚場ざまならんとて、これを物色搜索せしむること兩三日にして、始めて本人を見出

安治川 淀川の分流安
治川の畔
現大阪市此花
區の内
堂島の西南に
當る
雜魚場 現同市西區江
戸堀下通に在
つた生魚市場
堂島の南に當
る

し、これを家に呼んで自ら事の次第を語り、先の錢糶に不足の錢五文か十文を拂ひ、他に又煩勞を謝する爲とて若干の錢を與へて、不注意の罪を肴屋に詫びたりとぞ。

此の一條は當時藩邸の内外に知る者なし。我々兄弟姉妹も極めて幼少の時のことなれば、假令これを見るもこれを解せず、其の事情を詳かにするものは唯汝等の大母一人のみ。思ふに、大父の性質として、名聞の嫌疑を避けたるものならん。然りと雖も、事既に過去に屬したり。況や君の長逝は四十餘年の古へに在り。余は今日に至りて、此の事實を湮没するに忍びず。これ當に福澤家のみならず、天下の美談といふべきなり。汝等成長の後、公然これを人に語りて先人の美德を發揚せよ。又これを發揚すると共に、己自ら省みる所なかる

堀川

現京都市上京區内、東堀川

通

伊藤氏の塾が

在った

伊藤仁齋

儒者

寶永二年（二

三六五）歿

年七十九

伊藤東涯

儒者

仁齋の子

元文元年（二

三九六）歿

年六十七

野田笛浦

名は逸

儒者

丹後國（京都

府）田邊藩士

安政六年（二

五九）歿

年六十一

べからず。此の祖父にして如何なる孫あるべきや。汝等は名家の子孫なり。子孫にして先人を辱しむると否とは、唯汝等が一心に存するのみ。

蓋し、大父君は、單に正直の一端に依頼して身を立つるが如き小丈夫に非ず。壯年の時より藩の會計官吏と爲りて大阪の藩邸に在勤し、當時の富豪大賈に近接して財政の衝に當り、或は藩米を賣り、或は藩債を募り、金利の高低を論じ、返濟期限の緩急を談じ、時に或は金主の歡心を得んが爲にとて、共に飲み、共に遊戲する等、大阪町人社會の交際に俗中の俗を極めて、恰も二十餘年を紅塵の間に消磨したるが如くなれども、忙中自ら閑あり、一方には深く文事に志して、學流は堀川の伊藤仁齋東涯の經義を悦び、殊に文章を能くして詩も亦あり。野田

笛浦の如きは親友中の一人なりき。されば君の一身は俗吏なり、經學者なり、又詩文家なり。心事極めて多端、思想極めて廣くして一方に偏することなく、前記肴屋の談の如きは、唯その素質の偶然にも溢れて事に發したるまでのことなれば此の一細事固より以て君の平生を盡くすに足らず。余が持論に於ても人の正直のみを唯一の徳義と認め、畢生の能事終るとして、一向にこれに心酔するものに非ざれども、骨肉の私より汝等の爲に謀れば此の細事も亦自ら先人の言行録中に現れたる美事の一斑として記念すべき所のものなり。

今日幸にして君の生前に集められたる古錢八十七文の存するあり。かの肴屋に渡したる錢緡中の古錢も、必ず此の中にあるや明らかかなり。余が年來身邊を離さずして、少年遊學

中も此の錢ばかりは大切に携帯したる所のものなれども、汝等も齡漸く長じて、數年の後は社會の一人たるべきものなれば、今この錢を分かち、其の一分を汝等二男四女の間配分して、今後修身處世の記念品と爲し、一分は余が座右に留めて、以て修身の實鑑とすること舊の如くすべし。

福澤の家はもと小祿の貧士族にして、餘財あることなし。余が相續の時家に在りしものは、唯數百冊の漢書と僅かの書畫、刀劍とのみなりしが、是等の品も余が勤學中に賣り盡くして學資に供し、今に至りて汝等が爲に先代の遺物としては殆ど一物もなし。假令是もあるも、今日金を出せば買ひ得べきものに過ぎざれば、これを得ずして遺憾に非ずと雖も、獨り此の古錢に至りては、千金を投ずるも買ふべからざるの實物にして

先人の餘光の存するものなり。今、余と汝等と、共に此の餘光を被る、遺物の價値大なりといふべし。謹んで此の寶物を失ふ勿れ、謹んで此の寶物の精神を忘るゝ勿れ。汝等子あらばこれを子に傳へよ、孫あらば又孫に傳へしめよ。世々子孫、福澤の血統、孜孜勉強して自立自活、よく家を治むべきは言ふまでもなきことながら、萬一不幸にして財に貧なるの憂あるも、文明獨立の大義を忘れ、節を屈して心飢うるの貧に沈む勿れ。

(古錢配分の記)

古錢配分の記
福澤全集第十
卷所收

一六 浮島が原

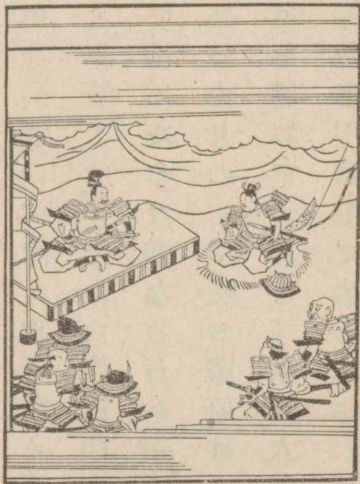
九郎御曹司
源九郎義經
浮島が原
現静岡縣駿東、
富士兩郡の界
に在る愛鷹山
南麓一帯の地
兵衛佐殿
前右兵衛佐源
頼朝
信濃
信濃國
現長野縣
木曾
木曾冠者源義
仲
甲斐
頼朝の從弟
甲斐國
現山梨縣
鎌倉殿
頼朝

九郎御曹司、浮島が原に著き給ひ、兵衛佐殿の陣の前三町ばかり引退いて陣を取り、暫く息をぞ休められける。佐殿これを御覽じて、こゝに白旗白印にて清げなる武者五六十騎ばかり見えたるは誰なるらん、覺束なし。信濃の人々は、木曾に從ひて止りぬ。甲斐の殿原は二陣なり。如何なる人ぞ、假名實名を尋ねて參れとて、堀彌太郎を御使にて遣はされ、家の子郎等數多引具して參る。

間を隔てて、彌太郎一騎進み出でて申しけるは、こゝに白印にておはしましたし候は、誰人にて渡らせ給ひ候ぞ。假名實名を慥かに承り候へと、鎌倉殿の仰せにて候と申しければ、其の中

奥州
陸奥國
現青森・岩手・
宮城・福島四
縣の地

佐藤三郎
義經の臣



元祿十年義經記挿繪

に二十四五ばかりなる男の色白く尋常なるが、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧の、裾金物打ちたるを著、白星の五枚兜に鍬形打ちて猪頸に著、大中黒の矢負ひ、滋籐の弓持ちて、黒き馬の太く逞しきに乗らるるが、歩ませ出でて申されけるは、鎌倉殿も知らしめされて候。童名は牛若と申し候ひしが、近年奥州に下向仕り候うて居候ひつるが、御謀反の由承り、見参に入れて給ひ候へ」と仰せられければ、堀彌太郎、さては御兄弟にてましましけりと、馬より飛んで下り、御曹司の乳母子、佐藤三郎を呼び出して色代

あり。彌太郎、一町ばかり馬を引かせけり。

かくて、佐殿の御前に参り、此の由を申し上げければ、佐殿は善悪に騒がぬ人にておはしけるが、今度は殊の外に嬉しげにて、「さらばこれへおはしまし候へ。見参せん」と宣へば、彌太郎やがて参り、御曹司に此の由を申す。御曹司、大きに悦び、急ぎ参り給ふ。佐藤三郎、同四郎、伊勢三郎、これ等三騎召し連れて参らる。

佐殿御陣と申すは、大幕百八十張引きたりければ、其の内は八箇國の大名、小名並み居たり。各敷皮にてぞありける。佐殿御座敷には、疊一疊敷きたれども、佐殿も敷皮にぞおはしける。御曹司、兜を脱ぎて童に持たせ、弓取り直し、幕の際に畏まりてぞおはしける。其の時、佐殿敷皮を去り、我が身は疊にぞ

同四郎
佐藤忠信
義經の弟
伊勢三郎
義經の臣
八箇國
關東八箇國
現關東地方一
圓の地

直られける。「それへ」とぞ仰せらるゝ。御曹司暫く辭退して、敷皮にぞ直られける。佐殿は、御曹司をつくゝと御覽じて、先づ涙にぞ咽ばれける。御曹司も其の色は知らねども、共に涙に咽び給ふ。

互に心のゆくほど泣きて後、佐殿涙をおさへて、さても頭殿に後れ奉りて、其の後御行方を承り候はず。幼少におはし候時、見奉りしばかりなり。頼朝池の尼の宥められしによりて、伊豆の配所にて伊東北條に守護せられ、心に任せぬ身にて候ひし程に、奥州へ御下向の由は、かすかに承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありと思し召し忘れ候はて、取敢へず御上り候こと、申し盡くし難く悦び入り候。これ御覽候へ、かゝる大事をこそ思ひ企てて候へ。八箇國の人々を始め

頭殿 左馬頭源義朝
頼朝兄弟の父
永暦元年(一
八二〇)歿
年三十八
池の尼
池禪尼
平忠盛の妻
清盛の繼母
伊豆の配所
現静岡縣田方
郡菲山村に在
つた
伊東・北條
共に當時平氏
の家臣

として候へども、皆他人なれば、身の一大事を申し合はする人もなし。皆平家に相從ひたる人々なれば、頼朝が弱まじげを守り給ふらんと思へば、夜も夜すがら平家のことのみ思ひ、又ある時は、平家の討手上せばやと思へども、身は一人なり、頼朝自身進み候へば東國覺束なし。代官を上せんとすれば、心安き兄弟もなし。他人を上せんとすれば、平家と一つになりて、却つて東國をや攻めんと存ずる間、それも叶ひ難し。今御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭殿の蘇らせ給ひたるやうにこそ思ひ候へ。我等が先祖八幡殿の後三年の合戦に、むなうの城を攻められしに、多勢皆滅されて、無勢になりて、栗屋川の端におし下りて、幣帛を捧げて、玉城を伏し拜み、南無八幡大菩薩御擁護を改めず、今度の壽命を助けて、本意を遂げさせて給へ」と祈

八幡殿 八幡太郎源義家
陸奥守
嘉承元年(一
七六六)歿
年六十八
後三年の合戦
後三年の役
永保年中に義
家が清原家衡
武衡等を討つ
た戦
栗屋川
現秋田縣仙北
郡金澤町を流
れる溪流

刑部丞
源義光
通稱新羅三郎
義家の弟
大治二年(一
七八七)歿

山科
現京都市東山
區山科

誓せられければ、まことに八幡大菩薩の感應にやありけん、都
におはする御弟刑部丞は、内裏に候ひけるが、俄かに内裏を紛
れ出で、奥州の覺束なしとて、二百餘騎にて下られける。路次
にて勢うち加り、三千餘騎にて栗屋川に馳せ來て、八幡殿と一
つになりて、終に奥州を從へ給ひける。其の時の御心も、頼朝御
邊を待ちえ參らせたる心に、いかでかまさるべき。今日より
後は、魚と水との如くにして、先祖の恥を雪ぎ、亡魂の憤を休め
んと宣ひもあへず、涙を流し給ひけり。御曹司は、兎角の返事
もなくして、袂をぞしぼられける。これを見て大名小名、互の
心の中推しはかられて、皆袖をぞ濡らされける。

暫くありて、御曹司申されけるは、仰せの如く、幼少の時御目
にかゝりて候ひけるやらん。配所へ御下りの後は、義經も山

鞍馬
鞍馬寺
現京都府愛宕
郡鞍馬村の鞍
馬山に在る
秀衡
藤原秀衡
鎮守府將軍・
陸奥守
文治三年(一
一四七)歿

義經記
八卷
室町時代に成
つた軍記物語
作者未詳

科に候ひしが、七歳の時鞍馬へ參り、十六までかたの如く學問
を仕り、さては京都に候ひしが、内々平家方便をつくる由承り
候間、奥州に下向仕りて、秀衡を頼み候ひつるが、御謀反の由承
りて、取敢へず馳せ參る。今は君を見奉り候へば、故頭殿の御
見參に入り候心地してこそ候へ。命をば故頭殿に參らせ候。
身をば君に參らする上は、いかゞ仰せに従ひ參らせては候べ
きと申しもあへず、又涙を流し給ひけるこそ哀れなれ。さて
こそ、此の御曹司を大將軍にて上せ給ひけれ。
(義經記)

室鳩巢

名は直清
徳川幕府の儒

官

江戸の人
享保十九年
(一三九四)歿

年七十七
余吾の湖

現滋賀縣伊香

郡余呉村に在

る琵琶湖北方

の小湖

徳川三河守秀康

家康の第二子

越前國(福井

縣)福井藩主
慶長十二年
(一六二七)歿
年三十四
越前
現福井縣の内

一七 余吾の湖

室 鳩 巢

徳川三河守秀康卿越前に封ぜられ給ひし後、阿閉掃部とて、武功の譽ありし者を、厚祿にて召し抱へられけり。又狛伊勢とて、これも國にて世祿の歴々なりしが、嫡子に鎧の著初せさせけるに、かの掃部を招待しつゝ、子に鎧著する事を頼みけり。さて饗膳すみ、祝の杯に及びし時、伊勢、今日は愚息が鎧の著初にて候まゝ、御身の御武功の事御物語り候ひて彼に御さかせ候へ」といひしに、掃部、いや、某が身の上に御話し申すべき程の武功は覺え申さず候。されど御望も黙しがたく候まゝ、某一生の中に武者振の見事なる士を一人見申して候、その事を話し申すべし。」

江州賤ヶ嶽の戦
天正十一年
(一六二四)羽
柴秀吉と柴田
勝家とが近江
國賤ヶ嶽(現
伊香郡伊香具
村に在る)に
於て戦つた戦



甲 冑 圖

「江州賤ヶ嶽の戦に、暮方に某一騎余吾の湖のわたりを引き候ひしに、敵とおぼしくて、うしろより詞をかけし故、馬を引返し候へば、其の人申し候は、今朝よりかせぎ候へども、よき敵にあひ申さず候。御人體を見うけ、幸とこそ存じ候へ。御不祥ながら御相手になり申すべし」とてすゝみより候故、それこそなたも望む所にて候へ」とて、互に馬を乗りはなし、已に槍をあはせんとしけるに、其の人「しばし御待ち候へ、今朝より雑兵をおほく突き崩し候故、槍よごれて候まゝ、

槍を洗ひ候ひて御相手になり候はん」とて、余吾の湖に槍を打ちひたし、二三遍洗ひつゝ、「さらば」とて突きあひしが、久しく勝負なかりし程に、日も暮れはててものあやめも見えずなりぬ。其の時、あなたより又詞をかけ、「もはや槍先も見えず候。御残り多くは候へどもこれまでにて候。御暇申し候べし。御名こそ承りたく候へ。某は青木新兵衛と申す者にて候」とて、某が名をも承り候ひて、此の後又陣頭にて出合ひ候はば、互に人手にはかゝり申すまじく候。もし又身方にて候はば、わりなく入魂いたし候べし。さらば」とて立別れしが、これ程見事なる武士はつひに見侍らず、いかゞなりはて候にや」と語りけり。

其の頃伊勢がもとへ心安く出入りする青木方齋といふ浪

青木新兵衛
上杉景勝の舊
臣
後徳川秀康に
仕へた

士あり。其の日も来て勝手に居たりしが、此の物語をききて、勝手よりにじりいてつゝ、掃部にむかひて、「さても只今の御物語承り、今更昔を思ひ、涙を落してこそ候へ。其の時の御相手になり候青木新兵衛は、はづかしながら我等にて候。かく申すばかりにては、うきたる事におぼすべく候」とて、其の時の雙方の鎧の緘、馬の毛色を一々いひけるが、一つも違はざりければ、掃部驚きつゝ、「さてく久しくてあひ候うて本望に候」とて、手前にありし杯を方齋にさし、「これをしるしに」とて、腰の脇差を抜きて引きけり。

それより方齋が名、國に高くなりし程に、秀康卿の耳へも達せしかば、掃部と同じ祿にて召し出されけりとぞ。

(駿臺雜話)

駿臺雜話
五卷
隨筆
寛延三年(一
四一〇〇)刊

一八 庭の梅

賀茂真淵

大比叡や小比叡の雲のめぐりきて夕立すなり

栗津野の原

信濃なる須賀の荒野を飛ぶ鷺の翼もたわにふ

く嵐かな

田安宗武

二つなき富士の高ねのあやしかも甲斐にもありとふ
駿河にもありとふ

賀茂真淵 國學者 歌人
遠江國(静岡縣)の人
明和六年(二四二九)歿
年七十三
大比叡
大比叡峯
比叡山の圭峯
小比叡
四明が嶽
大比叡峯の西に連なる
栗津野 現大津市の東部に在つた野須賀の荒野
現長野縣松本市の西南方に當る野
田安宗武 本姓徳川
將軍吉宗の子
國學者 歌人
明和八年歿
年五十七

眞帆ひきて寄せくる舟に月照れり楽しくぞあらむその舟人は
わが宿のそがひにたてるかしの木にかし鳥來なく頃は早きぬ

平賀元義

日竝べてきのふもけふも見つれども猶見のあかぬ庭の梅かも
わたつみの潮の八百路の八潮路ゆ吹きくる風は涼しくありけり
上山は山かぜ寒しちちのみの父のみことの足冷ゆらむか

平賀元義 歌人
備前國(岡山縣)の人
慶應元年(二五二五)歿
年六十六

上山 現岡山縣英田郡河會村上山

橘曙覽
歌人 勤皇家
越前國(福井
縣)の人
明治元年歿
年五十七

橘 曙 覽

髪しろくなりても親のある人もおほかるもの
をわれは親なし
たのしみはまれに魚煮て兒等皆がうましようま
しといひて食ふとき
夕顔の花しらじらと咲きめぐる賤が伏屋に馬
洗ひ居り

大隈言道

歌人

筑前國(福岡
縣)の人
明治元年歿
年七十一

大 隈 言 道

つのがみし浦の蘆原いつのまにやはらぎ靡く
夏は來ぬらむ

平戸

現長崎縣北松
浦郡平戸町
平戸島の東端
に在り壹岐海
峽に臨む
對馬
對馬島
玄海灘に在る
島
上・下二島よ
り成り長崎縣
上縣・下縣兩
郡を成す
野村望東尼
名はもと
歌人
勤皇家
言道の門人
筑前國の人
慶應三年(二
五二七)歿
年六十二
みかさの山
竈門山
現福岡縣筑紫
郡御笠村に在
る

見渡せばさもながながし平戸より對馬の沖に
わたす白雲
秋立ちて百舌鳴く野邊の静けさに萩のさかり
はいつかとぞ思ふ

野 村 望 東 尼

ただ一夜わがねしひまに大野なるみかさの山
は霞こめたり
昔わがま遠にうゑし梅さくらかへでも枝をさ
しかほしきぬ
常にみる松の木かげの一つ家の火影さびしき
秋は來にけり

愛宕の山
愛宕山
現京都市右京
區と京都府北
桑田郡との界
に在る

普賢菩薩
釋迦如來の右
脇士
諸佛の理徳・
定徳・行徳を
司どる

一九 智慮

昔、愛宕の山に久しく行ふ聖ありけり。年頃行ひて、坊を出づることなし。西の方に獵師あり。この聖を尊みて、常には詣でて物奉りなどしけり。

久しく參らざりければ、餌袋に干飯など入れて詣でたり。聖よろこびて、日頃の覺束なさなど宣ふ。その中に居寄りて宣ふやうは、このほどはいみじく尊き事あり。この年頃、他念なく經を保ち奉りてある驗やらん、この夜頃、普賢菩薩象に乗りて見え給ふ。今宵留りて拜み給へ」といひければ、この獵師「世に尊き事にこそ候なれ。さらば、留りて拜み奉らん」とて、留りぬ。

さて、聖の使ふ童のあるに問ふ、聖宣ふやう、如何なる事ぞや。己もこの佛をば拜み參らせたりや」と問へば、童は、五六度ぞ見奉りて候」といふに、獵師、我も見奉ることもある」とて、聖の後に、いねもせずして起き居たり。九月二十日のことなれば、夜も長し。今や」と待つに、夜半過ぎぬらんと思ふ程に、東の山の嶺より月の出づるやうに見えて、嶺の嵐も



萬治本字拾遺挿繪

すさまじきに、この坊の内、光さし入りたるやうにて明かくなりぬ。見れば、普賢菩薩、白象に乗りて、やう／＼おはして坊の前に立ち給へり。聖泣く／＼拜みて、如何に、主殿は拜み奉る

や」といひければ、如何は。この童も拜み奉る。いみじう尊し」とて、獵師思ふやう、聖は年頃經をも保ち讀み給へばこそ、その目ばかりに見え給はめ、この童、我が身などは、經の向きたる方も知らぬに見え給へる、心得られぬことなりと心のうちに思ひて、この事試みてん、これ罪得べき事にあらずと、尖矢を弓につがひて、聖の拜み入りたる上より差越して、弓を強く引きてひようと射たりければ、御胸の程に中るやうにて、火を打消す如くにて光も失せぬ。谷へとゞろめきて逃げ行く音す。聖「これは如何にし給へるぞ」といひて、泣き惑ふこと限りなし。男申しけるは、聖の目にこそ見え給はめ、我が罪深き者の目に見え給へば、試み奉らんと思ひて射つるなり。誠の佛ならば、よも矢は立ち給はじ。されば怪しきものなり」といひけり。

夜明けて、血をとめて行き、見ければ、一町許り行き、谷の底に大きな狸、胸より尖矢を射通されて死にて伏せりけり。聖なれど無智なれば、かやうにばかさされるなり。獵師なれども慮ありければ、狸を射殺し、そのばけたるをあらはしけるなり。

昔、右近將監下野厚行と云ふ者ありけり。競べ馬によく乗りけり。御門より始め奉りて、覺え殊に勝れたりけり。朱雀院の御時より、村上の御門の御時などは、盛りにいみじき舍人にて、人もゆるし思ひけり。

年高くなりて、西の京に住みけり。隣なりける人俄かに死にけるに、この厚行とぶらひに行きて、その子に逢ひて、別れの

朱雀院
朱雀天皇
第六十一代
村上の御門
村上天皇
第六十二代
西の京
右京
平安京の朱雀
大路以西の地
現京都市右京
區の一部
當時の郊外地

間の事どもとぶらひけるに、此の死にたる親を出さんに、門悪しき方に向かへり。さればとて、さてあるべきにあらず、門よりこそ出すべき事にてあれと云ふを聞きて、厚行が云ふやう、「悪しき方より出さん事、殊に然るべからず。かつは數多の御子たちの爲、殊に忌まはしかるべし。厚行が隔ての垣を破りて、それより出し奉らん。かつは生き給ひたりし時、事に觸れて情のみありし人なり。かゝる折だにもその恩を報じ申さずば、何をもてか報い申さん」と云へば、子どももの云ふやう、「無爲なる人の家より出さん事あるべきにあらず。忌の方なりとも、我が門よりこそ出さめ」と云へども、僻事なし給ひそ。唯、厚行が門より出し奉らん」と云ひて歸りぬ。

我が子どもに云ふやう、隣の主の死にたるいとほしければ、

弔ひに行きたりつるに、あの子どももの云ふやう、「忌の方なれども、門は一つなれば、これよりこそ出さめ」と云ひつれば、いとほしく思ひて、「中の垣を破りて、我が門より出し給へ」と云ひつると云ふに、妻子ども聞きて、「不思議の事し給ふ親かな。いみじき穀斷の聖なりとも、かゝる事する人やはあるべき。身思はぬと云ひながら、我が家の門より隣の死人出す人やある。返す返すもあるまじき事なり」と皆言ひ合へり。

厚行、僻事な言ひ合ひそ。唯、厚行がせんやうに任せて見給へ。物忌みし、奇しく忌むやつは命も短く、はか／＼しき事無し。唯、物忌まぬは、命も長く、子孫も榮ゆ。いたく物忌み奇しきは人と云はず。恩を思ひ知り、身を忘るゝをこそ人とは言へ。天道もこれをぞ恵み給ふらん。由なき事な侘び合ひそ。

とて、下人ども呼びて、中の檜垣をたゞ毀ちに毀ちて、それよりぞ出させける。

さて其の事世に聞えて、殿ばらもあざみ譽め給ひけり。さて其の後、九十ばかりまで保ちてぞ死にける。それが子どもに至るまで、皆命長くて、下野氏の子孫は、舍人の中にも多くあるとぞ。

(宇治拾遺物語)

宇治拾遺物語
十五卷
鎌倉時代初期
に成つた説話
集
作者未詳

二〇 狐塚

主 「このあたりの者でござる。某山田を數多持つてござる。當年は殊の外よう出來てござる。さりながら、この頃は鹿し猿し貉しが、出て田を荒します。太郎冠者を呼び出し、山田の番にやらうと存ずる。」

主 「やい、太郎冠者あるか。」

太 「はあ。御前にをります。」

主 「汝を呼び出す事、別の事ではない。當年は身共の山田が殊の外よう出來た。それにつき、この頃は鹿猿が田を荒す程に、汝は今夜山田へいて、鳥獸も來たらば、追うて番をせい。」

太 「畏まつてござる。私一人でござるか。」

主 「いや後程は次郎冠者も見舞にやらう程に先づ行け。」

太 「心得ました。」

主 「さりながら、この中は狐塚の狐が出てばかすといふ程に、ばかされぬやうにして番をせい。」

太 「それはこはい事でござる。最早参ります。」

主 「明日早々歸れ。」

太 「はあ。」

主 「えい。」

太 「はあ。」

太 「さてもく、迷惑な事いひつけられた。夜晝使はるゝといふは氣の毒な事ぢや。参る程にこれぢや。先づこれにゐて番を致さう。」

主 「太郎冠者を山田へ番に遣はしてござる。定めてさびしうしてゐるでござらう。次郎冠者を見舞に遣はさうと存ずる。」

主 「やい、次郎冠者あるか。」

次 「これにをります。」

主 「汝は大儀ながら山田へいて、太郎冠者が伽をしてやれ。」

次 「畏まつてござる。」

主 「小筒も少し持つて行け。」

次 「心得ました。」

次 「これはさて迷惑なれども、参らずばなるまい。主命ぢや、是非に及ばぬ。これは暗うてどこやら知れる事でない。」

呼ばはつて見よう。」

次 「ほうい〜、太郎冠者やい、どこにゐるぞ。」

太 「さればこそ狐が出た。あれは次郎冠者が聲ぢや。よう似せた。おのればかざるゝ事ではないぞ。先づ眉毛をぬらさう。」

次 「ほうい〜。」

太 「ほうい〜。こゝにゐるは。」

次 「どこにゐるぞ。」

太 「こゝにゐるは。やあ、次郎冠者か。」

次 「なか〜。頼うだ人がいひつけられて伽に來たは。」

太 「ようこそおりやつたれ。さても〜ようばけた。そのまゝの次郎冠者ぢや。捕へて縛つてやらう。」

太 「やい次郎冠者、最前向かふの山から大きな鹿が出たを、身

共が追うたれば、こなたの山へく
わらくわらと逃げたは。」

狐 次 「それはでかした。」

太 「どつこへ。やる事ではないぞ。」

(後から鳴子の繩で次郎冠者を後手にしばる。)

次 「これは何とするぞ。」

太 「何とするとは。狐め、ばかざる事ではないぞ。」

次 「おれは次郎冠者ぢや。」

太 「何の次郎冠者。おのれ縛つて、この柱にくゝつて置いて。狐殿、よい體なりの。おのれ今に皮を剥いてくれうぞ。」



狐 塚 (江戸初期肉筆畫)

主 「太郎冠者、次郎冠者を山田へ遣はしてござる。心もとなうござる。見に參らうと存ずる。」

主 「ほうい〜。太郎冠者やい。次郎冠者やい。ほういほうい。」

太 「これはいかな事。また狐が出をつた。あれは頼うだ人の聲ぢや。これも捕へてやらう。」

太 「ほうい〜。」

主 「ほうい〜。どこにゐるぞ。」

太 「こゝにゐます。」

主 「やあ、これにゐるか。さびしからうと思つて見舞に來た。次郎冠者を先へ遣おしたが。」

太 「なか〜。あれにゐます。これはいかな事。これもようばけた。そのまゝ頼うだ人ぢや。縛つてくれう。がつきめ。おのれだまさるゝ事ではないぞ。」

主 「これは何とするぞ。身共ぢや。」

太 「おのれもようばけた。先づ縛つて、この大木にくゝりつけて置いて、致しやうがある。狐は松葉でふすべるといやがるといふ。ふすべてやらう。さあ〜、尾を出せ。鳴け。鳴け。」

主 「おのれ太郎冠者め。主をこのやうにして罰當りめ。」

太 「何を狐殿いはるゝ。さらば次郎冠者狐もふすべてやらう。さあ〜、鳴け〜、こん〜といへ。」

次 「これは何とする。」

太 「あれや／＼、いやがるは、いやがるは。おのれ二匹ながら鎌を取つて来て、皮を剥いてくれうぞ。待つてをれ。ようばかさうと思つたなあ。只今殺してくれうぞ。鎌を取つて来るぞ。」

主 「さても／＼、氣の毒な奴ぢや。やあそれに見ゆるは次郎冠者か。」

次 「さやうでござる。此方は頼うだ御方か。」

主 「なか／＼。汝も縛りをつたか。」

次 「いかにも縛られました。」

主 「何と鎌を取つて来る、殺さうといひをつたが、何とそちが繩はほどかれぬか。」

次 「されば、どうやら繩が解けさうにござる。解けますぞ、解けませんぞ。さあ解きました。どれ／＼、此方も解きませう。さても／＼憎い奴でござる。何としたものでござらう。」

主 「いや／＼、この體ではそばへよるまい程に、元のやうにしてゐて、これへ來たらば捕へてあいつを揺りにあげう。」

次 「一段とようござらう。」

主 「さあこれへよつて元のやうにしてゐよ。」

次 「心得ました。」

太 「狐めは二匹ながらをるか知らぬ。この鎌で打殺してくれう。さあ今打殺すぞ、打殺すぞ。」

主 「それや次郎冠者。」

續狂言記
五卷
狂言集
元祿十三年
(11360)刊

次 「心得ました。」

主 「おのれは憎い奴の。次郎冠者、足を持って。」

次 「心得ました。」

主 「さあ、揺りに上げ、揺りに上げ。」

太 「これは何と狐どもするぞ。」

主 「狐とは、まだおのれめは憎い奴の。縛りをつたがよいか。これがよいか。」

太 「さては頼うだ人、次郎冠者か。免させられ。まつびら、こゆるされ。まつびら、ごゆるされ。」

次主 「どこへ失せる。やるまいぞ。やるまいぞ。」

(續狂言記)

菊池寛
小説家 劇作

帝國藝術院會

員

明治二十一年

生

延享二年

二四〇五年

櫻町天皇の御

代

耶馬溪

現大分縣下毛

玖珠兩郡の地

に在る名勝

青の洞門

一 耶馬溪名所の

現下毛郡東耶

馬溪村に在る

隧道

二 敵討以上

菊池寛

時は、延享二年のある春の夜。處は、耶馬溪青の洞門の内部。舞臺一面列りぬかれたる岩石、右端が此の洞門の行詰りで、その岩面に面して、了海を始め數人の石工達が鎚を振るつてゐる。焚火がちろ／＼燃えてゐる。鎚の音が聞える。幕が開くと、みんな一齊に手を休める。

石工の一 皆が一緒に手を休めると、急に静けさが身に沁みて來るなう。

石工の二 道理ぢや、地の中へ幾町ともなく來てゐるのぢやからなう。

石工の三 今宵は、みんな了海様のお傍にゐぬと、あの晝の武士

種田郷
現東耶馬溪村
種田

が、合點せずに又狙ひに来るかも知れぬ。
石工の一 それや念もないことぢや。種田郷まで人をやつて、
武士が宿つてゐる宿の周圍には、ちやんと寢ずの番を附け
てあるのぢや。

石工の二 あゝもう、亥の刻だらう。手がしびれるやうに痛む
なう。

了海（しはがれた低い聲で） 尤もぢや、今日は岩の燒き方が、足り
なかつたと見えて、滅相岩が堅かつたなう。あゝもう皆の
衆、小屋へ引上げさつしやれ。了海も、もう休まう。さあ皆
の衆、引上げさつしやれ。

石工の三 それぢや、みんなお暇をするとしよう。了海様も、も
うお休みなされませ。さあ、わしが夜の具を取つて來て進

ぜよう。

石工の三、走り去つて、やがて蓆と汚き夜具とを持つて來る。程
よき所に敷く。

了海 あゝ、忝い。忝い。それぢや皆の衆、わしが先へ御免蒙
るぞ。（了海寢ようとする）

石工の一 それぢや、了海様又明朝お目にかゝりまするぞ。

石工の二 御免なさりませ。

石工の三 御免なさりませ。

石工遠く去る。了海暫く眠る振をして、又むく／＼と起き、合掌
して低聲に觀音經を誦す。

了海 過去の罪業報い來て、實之助様のおはせられたからは、
命は風前の燈ぢや。生ある中に、一寸なりとも一尺なりと

觀音經
妙法蓮華經觀
世音菩薩普門
品
法華經二十八
品の一
觀世音菩薩の
慈悲を説いた
經

も、掘り進まいでは叶はぬ所ぢや。懈怠を貪る時ではない。岩面に膝行し、聲を勵まして観音經を誦しながら、狂へるが如く、打ち進む。暫くすると、實之助が舞臺の左端から忍び寄つて来る。右に太刀を抜きそばめ、左手を地につきながら、徐かにく、忍び寄つて来る。了海は夢にも知らざる如く、観音經を誦しつづける。實之助、走り寄り、寄らんとして逡巡す。暫く太刀を振翳して切らんとし、しかも相手の一心不亂なるを見て討ちがたく、遂に刀を鞘に收めて去らんとす。

了海 (急に振返つて) 實之助様! 何故お斬り遊ばされませぬか。

實之助 (不意に言葉をかけられて、稍狼狽して言葉なし) ……

了海 晝間の仕儀はさぞ御無念に御座りましたらう。いざお斬り遊ばしませ。今こそ妨いたすものは御座りませぬ。

邪魔の入らぬ中、いざお斬りなさりませ。

實之助 了海とやら、此の上はいさぎよく、此の刳貫成就の折を相待たうぞ。敵を眼前に控へながら、武士たるものが、手を空しうする無念さに、つがへた約束をも反古にいたした、兩斷にいたさんと忍び寄つたれども、其の方が一心精進の氣高さに、瞋恚の炎も打消されて、高德の聖に對し、忍び寄る夜盜の如く、獸の如く、窺ひ寄る身があさまじうて、太刀を取る手が心ならずも鈍つたは。此の上は、心長く其の方が本願を達する日を相待たうぞ。

了海 (手を突き平伏しながら) 極重悪人の拙僧に、大願成就の月日を借して下さりまするか。忝う御座ります。此の上は、身を粉に碎いて、明日明後日にも刳り開く心にて、鎚を

振るふで御座りませう。御孝心深き貴方様に長い御辛苦をかけまして、申譯はありませぬ。お許し下さりませ。お許し下さりませ。

了海、實之助に近寄りながら、頭を下げる。

實之助 敵同志となるも宿世の業と申すことぢやが、いかに了海とやら、拙者もたゞ空しく此の地に止つて、其の方達の働くを見るより、及ばずながら鎚を取つて、一片二片の岩なりとも、削り取つて得させよう。其の方が本懐の日が近くなるのは、取りも直さず拙者が本懐の日が近づくのぢや。

了海（感激しながら）よい所にお氣が附かれました。貴方様の御助力は、百萬の身方よりも頼もしい御座ります。貴方様のお顔を見て居れば、この了海奴も、片時も鎚が休められ

ませぬわい。

實之助 たゞ徒然に瞋恚のほむらに心を爛らせてゐるよりも、世のため人のために、鎚を振るうてゐる方が、此の實之助にも心安いと云ふものぢや。さらば了海どの、刳貫の開くまでは身方なれど、

了海 おゝ、一寸でも二寸でも、向かふへ通りましたその節は、たゞ兩斷になさりませ。そなた様の本懐と、了海奴の本懐とが成就する日が待ち遠しう御座ります。は。

實之助 それ迄は、敵同志が肩を並べて鎚を振るふも亦一興であらう。

二人相見て淋しく笑ふ。

前と同じく洞門の内部。前場より一年餘を經過したる延享三年九月十日の夜。前場と稍異なり、了海と實之助とが相並んで舞臺の中央に座を占め、互にたゆまず鎚を振るつてゐる。

實之助 えいつ！

了海 おゝつ！

實之助 えいつ！

了海 おゝつ！

實之助（二寸手を休めて）石工達は、はや去り申したな。

了海（同じく手を休めて）石工達も、今日は終日身を粉にして働き申した。實之助様、そなたももう休ませられい！ 九つを廻りましたは。さあ、お引上げなさりませ。

實之助 なかゝ。夜更くると共に心神澄み渡つて、精力は又

一倍ぢや。

了海 昨夜もあのやうにお働きなされたものを、今宵はちと早目にお引上げなさりませ。

實之助 それは其の方に云ひたいことぢや。六十に近い御坊よりも先にわれらが引上げてよいものか。

鎚を振上げて又「えいつ」と打下す。

了海 おゝつ。（と應じて打つ）

暫く二人とも打ち續ける。

了海（又手を止めて）昨日石工の一人が、鎚音の合間に、かすかな鳥銃の音を耳にしたと申して居つたが、御身様はお耳になされましたか。

實之助 身どもは、鳥銃の音は耳にせねども、一昨日の晩であつ

たか、かすかに瀬鳴りの音を聞いたやうに覺ゆれども、それも鎚を持つ手を休めてふとまどろんだ折の夢かも知れぬのぢや。



門洞の青溪馬耶

了海 御身様が來られてからも、もう一年に近い。あゝ待ち遠しいことで御座る。まして、此の一月二月、了海の身も心も漸く衰へ果てまして、力も十が一も出ぬやうになり申した。今日明日と頼まれぬ命のやうに覺えます。萬が一、鎚を持ちながら息が絶え果てるなどのことがありま

したら、身の無念は兎も角、御身様に申譯のたたぬことと、精神を勵ましては居りますれど、あゝ今ははや、了海が辛抱の綱も切れ申した。あゝ岩よ。此の一念に微塵となれ。(烈しく打下す)

實之助 たゞ不退轉の勇氣ぢや。此の期に及んで退轉なさは、九仞の功も一簣にかくるのぢや。心を確かにお持ちなされい。今となつては、たゞ精進の外は御座らぬ。えいつ！(烈しく打下す)

了海 いかにも御身様の仰せの通りぢや。一下の鎚にも懈怠疑惑の心があつてはならぬは。念彼觀音力！おゝつ。(打下す)

了海 あゝつ。(と鎚を捨てて、右手を左手にて握る)

實之助（駈け寄つて）如何なされた。如何なされた。

了海 殊の外に脆い岩で、力餘つて拳迄が貫ぬき申した。（ふと、了海岩面に開かれた穴に氣が附く）御覽なされい！ 不思議な穴が開き申したぞ。

實之助（穴の所に近づきながら）不思議ぢや、風が通ふは。

了海（狂氣の如く）何々、風が通ふとは。（錘を振上げて、烈しく打ち續ける。岩、それに随つて崩れて洞になる）崩れる、崩れる。快く崩れるぞ。

實之助（了海と並んで、狂氣の如くに錘を振るふ）貫ぬけるは。快く貫ぬけるぞ。

了海 あゝ風が通ふ。風が通ふ。さては刳りぬき了せたのか。實之助様、とくと御覽なされい。

山國川
現大分縣下毛郡發源し大分・福岡兩縣の界を北流して瀬戸内海に注ぐ

實之助（半身を穴から突出しながら）あゝ、正しく大願成就なるぞ。

ほのかに光が見えますは。闇の中にかすかに光るは、山國川の流れに相違ない。了海どの、正しく大願成就なるぞ。

了海（呻くが如く、言葉を發し得ず、たゞ合掌して身をもたえる）……

實之助 見える！ 見える！ 聞える！ 聞える！ 川の流
れが聞えるぞ。目の下に闇にもほのじろく見えるのは、ま
ぎれもない街道ぢや。了海どの。お欣喜なされい。

了海（始めて聲を擧げて哄笑す）あな嬉しや。生きながら天上
界へ昇る心持がする。眼も耳も衰へて、川の流れも聞えね
ど、ほの明かりは見えまするぞ。あな嬉しや。嬉しや。嬉
しや嬉しや。心の中が煮えくり返るやうに嬉しい。（了海
身もだえをする）

實之助（了海の手をとりながら）尤もぢや、尤もぢや。たつた一年手傳うても此の嬉しさは分かるのに、まして二十餘年の艱難辛苦、佛神も嘉納ましまして、今宵本懐を遂げらるゝのも、もとよりその處ぢや。實之助も嬉しう御座るは。

了海（ふと考へ附いて）身の嬉しさに取りまぎれて、申し遅れしました。今宵こそ約束の日ぢや、いざお斬りなされませ。了海奴も、かゝる法悦の中に往生いたすなれば、未來は淨土に生まるゝこと、必定疑なしぢや。いざお斬りなされい。

實之助（了海の突いた手をとりながら）了海どの、もはや何事も忘れ申した。二十年來肝を碎き身を粉にする御坊の大業に比べては、敵を討つ討たぬなどは、あさましい人間の世の業だ。實之助も御坊の傍で一年の修行を積んだ仕合はせに、

修羅の妄執を見事に解脱いたしたは、見られい。月が雲を破つたと見え、月の光がさして來た。

了海（穴より顔を出しながら）おゝ、嬉しや〜。老眼にも山國川の流れが、ほのかに見え申すは。

實之助 此の月の光が、御坊には即身成佛の後光のやうに輝き申すは。此の實之助に取つても、妄執を晴す眞如の光ぢや。あゝ、快い月影ぢや。御坊を討つ代りに、此の岩をかう打たうぞ。（傍らなる長き柄の鎚を取り、力任せに打つ。岩石崩れ落ちて、山國川一帯の山河の夜の姿が見える）

了海 げに快い月影ぢやなう。（又、心附いて）いざ實之助様、お斬りなされませ。明日ともなれば、石工共がまた妨げ致さうも知れぬ。いざお斬りなされ。

柿坂
現下毛郡耶馬
溪村柿坂
青の洞門の西
南に當る

中川三郎兵衛
實之助の父

敵討以上
菊池寛全集第
四卷所収

實之助(近寄る了海の手を取つて)何をたはけたことを申さるゝ。
あれ見られい！ 柿坂あたりの峯々まで、月の光に浮かんで見えるは。あゝ大願成就思ひ残す方もない月影ぢや。

二人手を取つて、月の光に見惚れる。

了海(やがて念珠を取出してもみながら)南無頓生菩提！ 俗名

中川三郎兵衛様。了海奴が悪逆を許させ給へ。(泣きながら

ら頭を下げる)

實之助 恩讐は昔の夢ぢや。手を挙げられい。本懐の今宵を

ば心の底より欣び申さう。あな嬉しや〜。欣ばしや。

二人相擁して泣く。

(敵討以上)

理化學研究所
産業の發達を
圖るため物理
學及び化學の
研究並びにそ
の應用方面の
研究を爲す財
團法人組織の
研究所
東京市本郷區
駒込上富士前
町に在る
二神氏
二神哲五郎
物理學者
理學博士
九州帝國大學
助教授
明治三十二年
生

三三 日本の魔法鏡

私は嘗て、理化學研究所にゐられた二神氏から、かういふ話を聞いた。

西洋の博物館には、よく日本の古鏡が陳列せられてゐるが、中には鏡背の模様が鏡面に現れるのがあつて、日本の魔法鏡ジャパニーズマジックミラーと呼ばれて珍重せられてゐる。尤も、現れるといつても、鏡面に直接見えるのではなく、鏡面から反射する光を白壁か白紙に當てて見ると、そこに現れるのである。鏡背の模様が鏡面に現れるといふことはまことに不思議な現象で、「魔法」の名を得てゐるのも尤もなことである。——一體、かういふ古鏡が、現在には本元の日本にはあまり見出されないで、却つて海外の博

物館などに多く保存せられてゐるのは、明治初年に來た歐米人が鮮明な映像を結ぶガラス鏡を持ち來つてこれと交換し、又は他にも多く例があるやうに、僅かな代償を以て蒐集し去つたものであらう。

しかし、魔法鏡といつたところで、今日の科學でその物理的説明がつかぬといふわけではない。即ち、さういふ金屬性の鏡面が磨きに磨かれて精緻になるにつれて、その鏡背の模様や打ち出しによつて生じてゐた歪みが、鏡面の反射作用に現れるに至つたものであらうとせられてゐる。が、若しも我が國の古代に於て、かくの如き鏡が製作せられてゐなかつたとしたなら、近代文明といへども、恐らく「魔法鏡」なるものを製作することは勿論、かういふ現象を想像することさへ出來なかつたであらうと思はれる。

それならば、昔の人々は如何にしてかゝる精緻な鏡面を磨き出し得たかといふに、唯ベンガラと布片とを以て、人間の手で磨きに磨いた結果に過ぎない。今日に於ても、ドイツなどで製作せられる非常に精巧な學術用レンズの仕上げは、やはりベンガラを用ゐた手磨で、特に技術のすぐれた職工の技によつてなされるので、磨くといつたところで、それを磨滅させるのではなく、唯分子の流動を行はせるのであるといふ。そして、さういふ職工は一會社に一人といふやうに極めて少く、後継者が養成せられてゐない場合には、その職工の死によつて會社そのものが成立たなくなる場合さへあるといふ。これによつて思ひ合はされるのは、嘗てある物理學の教授

から聞いた話である。それは、どんなに精巧な尺度を以てしても、それを使用する目と手が不確かでは正確な測定は出来るものでない。例へば、今幾十人かの學生に同じ木綿糸を與へて、一メートルづつ切り取ることを命じて、その結果に於ては殆ど同じ長さのものは出来ない。甚だしい場合には、一番長いのと一番短いのと、差が全長の十分の一に及ぶことさへあるといふことであつた。

恐らく、この實驗の材料に細い棒とか針金とかを用ゐれば、測定の結果はもつと接近して來るのではないかと想像せられる。しかし、その結果が完全に一致することの困難なことは同様であらう。この事實を明らかに知らせるためには、伸縮性に富んでゐて、それだけ扱ひ方による個人差の現れやす

い木綿糸を用ゐるのが、適切な方法であるに違ひない。

今、この二つの事實について見るに、修練を重ねた人間の手や目が如何に精緻な働に堪へ得るものであるか、又その反對に、それを缺いた人間の手や目の働が、如何に不確かなものであるか、又、自然的に人間に與へられてゐる可能としての能力が、現實としての能力として展開し實現しきる爲には、どれほどの練磨が要せられるものであるか、まことに驚く外はない。近代科學の輸入以前に於ける我が國文化の發展は、大部分かういふ練磨の成果であつたといつても過言ではない。しかも、さういふ練磨も、唯目や手のみのことではなく、その基礎として、先づ心身を整へることが必要とせられ、更に平素に於ける絶えざる全人的精進と生活の統制とが必要とせられた。

かくて一口の刀を鍛へるにも、神に仕へる如き潔齋を以てし、一箇の茶碗を焼くにも、全心身を賭けるほどの集中が行はれ、そこに一種の「道」の成立をさへ見たのであつた。

然るに、近代科學の輸入以來、機械的製作の勃興と、文化の全面に互る科學的方法の擡頭とは、かくの如き傳統としての自己鍛鍊の意義を見失はしめ、爲に道としての全人的な練磨や、宗教的な精進潔齋は過去の迷信的遺物として殆ど忘れ去られるに至つたといつてよい。固より、かうした自己鍛鍊は、そのある部分は當時の人々がまだ科學的な知識なり方法なりを所有しなかつた爲に拂はせられた努力であつたに違ひない。随つて、科學の輸入發達によつて、それが漸く免除せられて來たといふ事實も認められなくてはならない。しかし又、

如上の事例が示すやうに、如何に正確な用具を以てしても、それを使用する手や目が練磨せられてゐなければ、その用具の効果をさへ十分に収めることが出來ない事實、又さういふ精進練磨の至り極まつたところには、時に今日の科學も及び難いやうな成果を収め得てゐる事實をも見逃してはならないと思ふ。往々、我が古昔の刀工や窯工の作品に見られる獨得な牙えや澁味には、單なる手作の爲の不器用さや歪みから來た偶然的な効果ではなく、製作者がひたすら技を磨き、自己を鍛へることによつて生じた、必然的な個性美であるとしなくてはならないものがある。——聞くところによれば、近代に於ける精巧な機械の一つである時計にしても、現代の機械によつて製作せられたものよりも、以前の職工の手作のものの方

が遙かに狂が少いといふ。

かく考へることに甚だしい誤がないならば、科學の眞の發達は、決して道としての精進練磨を不用ならしめるものではなく、又道としての精進練磨は、決して科學の發達と矛盾するものでもない。それどころではなく、恐らくヨーロッパ文化に於ける科學發達の基底にも、認識や技術の基礎としての主觀の調整や自己鍛鍊が、どんな形でなり存立してゐたに違ひない。唯、東洋わけても日本文化の發達に於ては、さういふ自己鍛鍊の側面が著しく自覺的に發達させられ、方法的にも確立せられて一つの傳統を形成してゐたのである。随つて、この兩者が相俟ち、科學研究はかくの如き傳統としての自己鍛鍊の上に立ち、傳統としての自己鍛鍊は科學研究の上に働く

に至つたならば、必ずやこゝに兩者のより新しい發展が期せられるであらう。

かくして、傳統的なるものとしての自己鍛鍊と現代的なるものとしての科學との結合による、いはば科學道ともいふべきものを樹立し、新しい日本文化を創造し、世界文化の上に一大進展を與へることは、現代の我々に課せられてゐる最も重大な、最も有意義な任務の一つではあるまいか。

國語 女子用 卷六 終

(覆木製本)

昭和十三年七月二十四日
昭和十三年七月二十四日
昭和十三年七月二十四日

印刷發行
訂正再版發行
訂正再版發行

國語女子用 全十卷
定價 各冊 金五拾五錢

版權
所有



編輯者 岩波編輯部

代表者 岩波茂雄

發行者 岩波茂雄
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

印刷者 白井赫太郎
東京市神田區錦町三丁目十一番地

精興社印刷

發行所

東京市神田區
一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話九段一八七・一八八番
振替口座東京二六二四〇番

